

---

# 女王様は王子様!?

鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女王様は王子様！？

### 【著者名】

鈴

23336

### 【作者名】

あらすじ

転校生して2日目、学校で一番可愛いと評判の子に、告白された！？

だけどその子は…その子は…！

草食系の可愛い男の子に襲いかかる？羨ましくて、時には悲しい青春ラブコメだ～！！

「知つてた？愛に、性別は関係ないのよーー！」

綺麗な夕日が眩しい夕方。

「私、アンタのことが…好きなの」

高校一年生の春。

ボクは、夕日の見える教室で告白されました。

しかも、その相手は学校で一番可愛いと評判の、<sup>はるき</sup>“春木<sup>みみ</sup>魅<sup>み</sup>”さんです…。

綺麗で長い水色の髪。

小顔で童顔。

パツチリした目。

たしかに…可愛いです。

そんな子にボクは、告白されました。

この告白がきっかけで、ボクはとてつもない渦に巻き込まれていく  
なんて…。

思つてもみませんでした。



## 1、転校生

6月の朝、高校の廊下

カツターシャツの上に、黒の長袖のカーディガンを着て、紺色のズボンを履いた男子生徒と。

メガネをかけた、赤いジャージ姿の女教師が歩いていた。

「“あまみや雨宮君”緊張してるの？」

「は、はい…。」

雨宮と呼ばれた男子生徒

フルネームは“あまみや雨宮 なつし夏希”

綺麗な、長い黒い髪。

可愛い声。

背は低く、ギリギリ160cmあるくらいだ。

男子ではなく、女子にしか見えない容姿。

今の姿はまるで、男子の制服を着ている女子にしか見えない。

夏希の隣の教師、綺麗で30歳くらいの高校の教師だ。

緊張している夏希を見て、クスクスと笑っている。

夏希は今日、転校してきた。

転校して来た高校の名は

“水の都高校”

男女共学の高校で、綺麗な名前に負けないくらいの高校だ。

玄関に大きな噴水があつたり、中庭が綺麗な芝生だつたり。

夏希には信じられない学校だった。

「はい、クラスに着いたわよ。アナタのクラスは、3組ね。」

夏希は今日から、水の都高校2年3組だ。

教室の中からは、騒がしい声が聞こえている。

もしかすると、転校生が来るという情報が、とつぶに流れていったのかもしれない。

バクバクと心臓が鳴る。

夏希は重度のあがり症で、大勢の人前で喋るのが苦手なのだ。  
ましてや、転校ってきて顔も名前も知らないクラスメイトに、自分だけ自己紹介をするなんて…。

「う…うう。」

夏希は、嫌だつた。

だが、拒否権は夏希には存在しなかつた。

予告も無しに、先生が教室のドアを開けたのだ。

「 ちょっ … 」

「 は～い、静かに！～朝のホームルーム始めるわよ～！席に座りな  
れい。 」

先生は教室に入つていつた。

ドアは開きっぱなし、先生は夏希が後ろから着いてくるだらつと思  
つていたようだ。

だが、夏希は廊下に立ち戻くしたままだ。  
何故なら、緊張で足が動かないから。

「 あ～り～～どうしたの？早く入つてきなさい。 」

「 は…は…～… 」

声が裏返り、変な声がでる。

力チ力チに緊張している夏希は、まるでロボットのようなカクカク  
した動きで教室に入つた。

教室にいる生徒達の目線が、夏希に集中する。

ヒンヒンと小声で話していたり、笑っていたりする声が聞こえる。

そして夏希は、教室のドアを閉めるのを忘れた。

「はい、もう知っている人は知っているかもしませんが。このクラスに、新しいお友達が増えます。」

先生は黒板に夏希の名前を書きながら、まるで小学校のよつな紹介をした。

「じゃあ、自己紹介お願ひね」

先生は、下を向いている夏希にバトンタッチした。

「は……はひい……！」

また、声が裏返った。

そして、クスクスと笑う声が増えた。

夏希は頭を下げながら

「ボ、ボクの名前は……あ、雨宮……な、夏希……です……い……家の……じ……事情で、転校しました……！……な……仲良く……してくだしゃい……！」

“ してください ”  
声が裏返つたままで、しかも噛んだ。

「 キヤハハハ ! ! !

教室が笑いに包まれた。

「 …え ? 」

夏希は顔を上げる。

「 キヤー ! ! 可愛い ! ! !

「 えつ ! ? 本当に男か ! ? 「

「 女の子にしか見えない ! ! !

クラスのほとんどが、夏希に軽く見惚れていた。

「 はーい、静かに ! ! !

先生は手を叩く。

「 じゃあ、雨宮君に質問がある人はいない ? 」

先生がそう言つた瞬間、30人いるであろう生徒の半分が手を挙げた。

「 はあ … 授業でもこれくらい手を挙げてほしいわね … 」

先生は苦笑いしながら、前に座つていた男子を指名した。

「俺、男に興味無いが…お前には興味がある」

男子生徒は最後まで言えずに、教室の床に沈んだ。

沈んだ理由は、男子生徒の隣に座っていた女子にアハを一発殴られたのだ。

女子の子は、今じゃのギャルと呼ばれる女子高生の格好をしていた。

「バカ言つてんじゃないわよ変態…ねえねえ…彼女とかいるのぉ？」

女子の子はさくさく紛れて、質問した。

「え…あ…」

夏希は困つてしる。

「あ、いないんだ…」

図星だつた。

今の…と言つたか、夏希は生まれてこれまで、女性と付き合つたことがないのだ。

無論、男とも付き合つたことがない。

「じゃあ、私狙つちゃうかもねえ~」

「う…うう」

夏希は思わず顔を真つ赤にした。

それだけで、何人かの生徒がザワザワと騒ぎ始めた。

「ほーらーーー静かにーーー

他に質問は無いの？

これで最後の質問にするわよーーー」

そして先生は、とある生徒を指名した。

「じゃあ、 “春木さん” 。

一番後ろの、窓際に座っている生徒。

“春木 美魅” 。

綺麗な水色の長い髪。

綺麗で可愛い顔立ち。

セーラー服がよく似合つ子。

その子は言った。

「キモい」

## 2、パシリ！？

「えつ……？」

わざわざまで騒がしかつた生徒達が、一瞬で黙つた。

「聞こえなかつたの？」

“キモい”つて言つたのよ。」

美魅の言葉に、夏希は困る。

「皆もよ……可愛い可愛いいつて、バカじやないの？  
あんなチンチクリンのビコが可愛いの？」

美魅は立ち上がり、教室にいる生徒達を見渡す。

「ほり、早く言いなさいよ。」

バンバンと机を叩く美魅。その行為は、生徒達を怯えさせているようにも見える。

「ほり見なさい。やつぱり可愛いのは……」の“私”ね。」

悪者キャラがよく笑う笑い方で、笑う美魅。本当に悪者キャラに見えてきた。

「もういいわ、邪魔したわね。」

美魅は夏希を睨みながら、笑つて席に座る。満足したようだ。

「あ……じゃあ兩宮頬、後ろの空いてる席に座つてちょうだい……。」

今まで美魅の発言を、止めようとはせず、ただポカンと見ていただけの先生は、夏希の席を指した。

そこは、美魅の右隣の席だった。

「ううー!？」

夏希は嫌だと思ったが、弱気な性格の夏希だから、何も言わずに席に向かつた。

クラスメイトと田を合わすのが嫌だった夏希は、下を向いたまま席に急いで座つた。

「フンッ……。」

左から、美魅の視線を感じる。夏希は怖くて、前で色々話している先生を見ていることしか出来なかつた。

「はい、じゃあ朝のホームルームを終わりますね。」

先生は笑顔で、教室から出ていった。今から10分休んで、一時間目の授業が始まる。

「はあ……」

夏希は軽いため息をついた。周りに聞こえないようになしたつもりだつたが。

「あら? ため息なんてつこちやつて、そんなに私が気に入らないかしら?」

左から、声がした。

「えつー! ?」

美魅の言葉は聞こえたが、あまりの内容に聞き直してしまった。

「あら? 一回で聞き取れないなんて……そんなに私と会話したくないのかしら?」

「そ……そんな! ?と書つてないですよ……何書つてるんですか! ?」

夏希は慌て言葉を返すが。

「階から可愛いつて言われたからつて、調子に乗らないでちょうどいい。世界で一番可愛いのは“私”なんだから! ! !」

「……」

夏希は思つた、 “ とんでもない人に目をつけられた ” と。

「分かつたの! ?分かつたら返事しなさいよ! ! !」

それと、自惚れて自分を可愛いと思わないでちょうどいい……

「は……はー……」

別に自分を可愛いと思つていなくて、世界で一番美魅を可愛いとも思つていない夏希は、呆れたように返事した。

「分かつたならいいわ……！」

「ご機嫌になつた美魅。夏希は、2年3組になつて數十分で疲れていった。

「それじゃあ、貴方は今から私の“パシリ”ね。」

「くつー！？」

今、美魅の口からとんでもない言葉が飛び出た。

「は……パシリー！？」

長い髪をサラリとなびかせて、美魅は呟つ。

「光栄に思ひなさい。

貴方ごときが、私のパシリになれるんだから。」

「ヤーヤと笑つて、夏希をからかつていてるのか、それとも本気なのか……。

とつあえず、この余話は一時間田開始のチャイムで強制終了された。

「フンッ、これから楽しみね。」

美魅は夏希に聞こえるよつに、そう呟いた。

「うう…。」

おかしい。何かが変だ。

普通、転校して来たら何人かのクラスメイトに声をかけられるのが、王道なのだが…。誰一人として夏希に寄つてこないのだ。まるで、何かを恐れるかのように…。

「お茶を買つてきなさい。」

「ええつー…？」

だが、例外が一人。

美魅だけは、夏希に平氣で話しかけて、パシリ扱いをしている。

「聞こえなかつたの？早くお茶を買つてきなさい。まつたく、ノロマね。」

今は昼休憩。

皆、お昼ご飯を食べている。無論、夏希も教室で何故か美魅と一緒に食べていた。

ところが、美魅が一方的に夏希を誘ったのだ。

「お茶つて……。」

「体育館の近くにあるわよ。早く行きなさい……！」

「は……はい……。」

夏希は何故か迷うことなく、渋々買いに行つた。

廊下に出て、夏希はいきなり“迷つた”。

夏希は、道を覚えるのが苦手で、先生から体育館の場所を聞いたが、忘れた。

「え……えつと……。」

とうとう夏希は歩き出した。

水の都高校は

一般的の教室が集められた“教室棟”。

教師達がいる“職員棟”。

実験や美術室などがある“授業棟”。

体育や部室などがある“体育館”

他にも小さな建物はあるが、代表的な建物はこの4つだ。

夏希達のクラスは、三階建ての、教室棟という建物の三階にある。

夏希はまだ、学校の形がよく分からない。

夏希が適当に歩いていると……。

「飲み物買いに行こ」つざえ

他の教室から、男子生徒3人が出てきた。  
飲み物…つまり、体育館に行く…！

夏希はこいつそりと後ろから3人に着いていくことにした。

すると……。

「あーあ…“ムカつく”よなあ。」

「本当だ。」

「何やつら、悪口を言い始めたようだ。」

「何で独り占めするかなあ。俺だつて仲良くなれたいのによ。」

「それに、あの“転校生”、女より可愛かった気がする。」

「ハハッ！…そりゃ言えてる。美魅の野郎より可愛いんじゃねえか  
？」

「だな。

つたぐ、美魅の野郎…転校生を独り占めしやがつて。

「仕方ねえよ、アイツに田をつけられると、『消される』や。」

“消される”

その言葉を聞いた夏希は、思わず声を出していた。

「あ…あのつ…！」

消されるつて何ですか！？

夏希は3人を呼び止める。

「あん？…つて…！お前、転校生！？もしかして聞いてたのかよ…？」

男子生徒達は驚いている。

「勝手に聞いてしまつて」めんなさい。

夏希はつづ向いてしまつが、引き下がる様子は無い。

「転校してきたばかりで、何も知らないのは可哀想だよな…。」

「そうだな、お前…美魅の野郎に言つなよ。」

「は…はい…言つません…。」

夏希は微笑み、男子生徒達に近寄る。

「消されるつてのはな…、その名の通り“消される”んだよ。」

「……えつ！？」

「美魅に逆らつたり、機嫌を損ねるよつなことをしたら、学校から消されるんだよ…。“家庭の事情のため転校”って事になつてな。」

「そんなこと…できるのですか？」

「できるさ。なんせ、美魅を溺愛している“美魅の姉”が、この学校を牛耳つてる奴だからな。

美魅が気に入らない事があつたら、姉は必ず動くのさ。」

3人の男子生徒は本当に怖がつていた…。

「そんな…。」

転校初日で、とんでもない人に関わつてしまつと思つていた夏希。

まさか、ここまでとは思つていなかつた…。

### 3、放課後

夏希が教室を出てから10分経つてから、夏希は戻ってきた。

「か…買つてきました。」

夏希の手には、ペットボトル一本。自分のも買つたようだ。

「あら、遅かつたわね」

美魅はお弁当を片付けていた最中だった。もつ食べてしまつたようだ。

「「」苦勞様。」

美魅は一ヶ口笑つて、夏希からお茶を一本貰つた。

「ひ…。」

夏希は一瞬、美魅の笑顔にドキッとしてしまつた。

…先ほどの、男子生徒達の話を聞いたのに、ドキッとしてしまつた。

“美魅は、気に入らない生徒を、学校から消す”。

「……。」

その言葉を思い出した夏希。

「はい、お金。」

えつ！？

えへ、じきなれどお茶のお金だ。」

美魅の手には130円握られていた

この学校の自動販売機は、130円で売っている。

「ありがとうございます。」

何よその態度 稲かお金を扱わぬ人間に見えただがして

## 少し不機嫌になつた美魅

そんなこと思ってないですか？

思わず咄を一にしてしまった夏希 実は少し思ってました

まいたく

夏希は美魅を見ながら、席に座る。その視線に気がついた美魅

何よ、また文句ある?」

「な、無いです！！」

夏希は、分からなかつた。今の美魅を見ていると、本当にそんなことをする人には見えなかつた。上から田線で、偉そうな所もあるが、学校から消すなんて、思えない。

「どうしたのよ？早く食べなさいよ。」

「あ、うん！－！」

夏希はお弁当の続きを食べて始めた。

時間は過ぎ、放課後。

「ねえ、一緒に帰らないか？」

「え？」

夏希は、オレンジ色の文物のリュックサックに、教科書など入れて、帰る準備をしていた。

そんなとき、夏希は女の子に声をかけられる。夏希のクラスメイトで、学級委員長だ。

短くて、赤い髪。

体は引き締まつていて、スポーツが得意なカッコイイ女の子。

夏希より背が高く。

セーラー服があまり似合つてないように思える。

「えつ……と」

転校初日で、クラス全員の名前と顔を覚えられる訳がない夏希は、戸惑つ。

「ああ、すまない。

私の名前は“ほたる螢”と言つ、あまみず“天水螢”だ。」

夏希に手を差し出し、握手を求めた。

夏希は微笑みながら螢の手を握る。

「あ、ボクは……」

「雨宮 夏希。

フフツ、あんな可愛い自己紹介をされたら、誰だつて覚えてしまつぞ。」

「あ、あはは……。」

可愛いと言われて、喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか分からない夏希は苦笑いをしていた。

「本題に戻るが、夏希君、一緒に帰らないか?」

「え? 別にいいんですけど…。」

「よかつた、じゃあ帰らう。」  
まだ手を繋いだままの2人。茧は夏希の手を引っ張つて、手を繋いだまま教室から出た。

すると…。

「な…ななつ! ? 何をしてくるの! ?」

教室を出た直後、夏希と茧は、廊下で美魅と遭遇した。

「あ…あなた達、離れなさい! …何で手を繋いでるのよ…。」

あたふたと、慌てている美魅。まるで、自分の玩具を他の誰かにとられるのを拒むみたいに。

「む、すまない。手を繋いだままだったようだな。」

茧は優しく、名残惜しそうに夏希の手を放した。

「つ… 夏希… うちに来なさい…。」

「えつ! ? 何で…?」

「いいからうちに来なさいよ…。」

美魅は夏希の胸ぐらを掴み、自分に引き寄せた。

「委員長、夏希は私のパシリなの。勝手に手を出さないでもらいたるかしら？」

「む？ “私の”？」

夏希は春木さんの“彼氏になつたのか？”

「か、かか、彼氏い！？んなわけないでしょーー！何で出逢つていきなり付き合つのよーー！運命の出会い意外ありえないでしょーー！」

「じゃあ、運命の出会いなのだな。」

「じゃあ、つて何ー？違つからーー！運命の出会いじゃないからーー！」

必死で否定する美魅。顔が真つ赤になつていて。

「もういいーーー！行くわよ、夏希ーー！カバンを持ちなさいーーー！」

美魅は夏希に無理矢理カバンを持たせて、首根っこを掴み引きずる。

「あ、ちょっとーーー天水さんと帰る約束がーーー！」

「そんなの知らないーーー早く行くわよーーー！」

その光景を笑いながら見ていた筈。

「今日は遠慮するところ。また近いうちに、一緒に帰る。」

手を優しく振つていた。

「は、はい。」

夏希も手を振り替えした。

「手を振らなくていいの！…ってか、委員長と絶対に一緒に帰っちゃダメ！…」

「えつ…？何ですか…？」

「何でもよ…！」

そんなに1人が寂しいって言うなら、特別に私が一緒に帰つてあげるわよ！…光栄に思いなさい…！」

「光栄に…」

光栄に思えない夏希。

「何よ、文句ある？」

「ありません…。」

完全に言いなりの夏希。もうパシリでなく、下僕になつている。

そんな2人を見ていた蛍が、ボソッと呟いた。

「…。春木さんって、あんな明るいキャラだったかな？」

#### 4、好きになつたきっかけ

「またくもう…」口夏希…」

校門を出で、ちょっと歩いた所で、美魅は怒つた。

「…何で怒つてるんですか?」

「知らない…」

「はあ…」

「あつあから」ればつかりだつた。

すると、怒つていたはずの美魅が…。

「あつ…」そうだ夏希。

今から、駅前のデパートに行きましょ。」

笑顔で夏希に提案した。

「い、今から?」

「そうよ、今からよ。

だつてまだ、夕方の4時よ。今から帰つても暇なだけよ。それに、夏希は転校してきたばかりで、まだこの町を知らないでしょ?」

「う、うん…。」

夏希はこの町に引っ越しして、まだ2日しか経っていない。  
だから、この町では右も左も分からぬのだ。

「つて」と、早く行きましょーーー！」

美魅は夏希の手を引っ張つて、歩き出した。  
遠くから見れば、手を繋いだカップルに見えた。

「そ、そんなに引っ張らないでください。」

「善は急げよ。」

夏希にとつては、全く善と思えなかつた。  
逆に、疲れたから夏希は早く家に帰りたかったのだ。

そんな夏希の気持ちを知らない美魅。とつても楽しそうだつた。

「ね…ねえ、春木さん。」

「美魅。」

「えつ？」

「私の名前、美魅って呼んでいいわよ。」

美魅は意地悪そつに笑つてゐる。

「じゃ…じゃあ、“美魅ちゃん”？」

「ちゃん付けつて…、アンタ小学生?まあいいけど。で、私に何か言いたいの?」

「あ、うん…。」

夏希は顔を少し紅くしている。

「手、繋いだままじや…その、恥ずかしいかな…。」

「つ…？」

改めて言われると、美魅もだんだんと恥ずかしくなってきた。

「ば、バカ!…」

美魅は振り払つように、夏希の手を放した。

「まつたく、アンタつてテリカシーの無い男ね!…」

「「ダメン…。」

子犬のように震えて、謝る夏希。それを間近で見た美魅は、キュンとなつてしまつた。

「ほ…ほら、早く行くわよ!…」

ちょっと照れているのか、あたふたしている美魅。夏希の前を歩く美魅、早足になつてゐる。

「ま、待つて美魅ちゃん！…」

「待たない！…」

つかつかと早く歩く美魅。照れているのを夏希に知られたくないあまり、周りの状況を見れていなかった。

だから、前から歩いてきている3人組の男達に気づくのが遅れてしまい、美魅は3人の中の1人にぶつかってしまった。

「いってーな、ねえちゃん。」

「あ、『めんなさい。』

美魅は、男達の目を見ずに謝った。

「はあ？お前、ちょっと態度悪くね？」

1人の男が、美魅の肩を掴んだ。

「ちょっと…触らないでよ…！穢らわしい…！」

パシッと、美魅は男の手を振り払った。

「ああ、…？んだお前…！」

「キヤツ…！」

怒った男は、美魅の胸ぐらを掴んだ。

「テメエ、調子乗つてんじゃねえぞ！－ああ、ん！？聞いてんのか  
！？」

美魅を弱いと感じた男達は、怒鳴りちりす。

するとい。

「な、何してるんですか！？」

夏希が美魅に追い付いた。

「夏希……。」

美魅は我慢していたが、今にも泣きそつた顔をしていた。

「んだお前。女か？」

「いや違ひぜ、男だ。多分コイツの彼氏だな。」

「美少女、美少年のカップルってか！？ガハハッ！－」

男達は美魅を捕らえたまま、笑い出した。

「何してるんですか！？美魅ちゃんを放してください！－！」

夏希は男達に駆け寄るが。

「放せえ？コイツが喧嘩売つてきたんだぜ？俺達は被害者だ。」

1人の男が、夏希の前に立ちはだかった。

「貴方達が被害者…？どう見ても、美魅ちゃんが被害者にしか見えないんですけど。」

怖かつた。だけど、夏希は美魅を助けたいといつ気持ちが、恐怖より勝っていた。

「うるせえ…！」

「つ…がつ…！？」

突然、視界がぐちゃぐちゃになり、右頬に熱くて鈍い痛みが走った。

殴られた。

コンクリートに倒れた瞬間、夏希は理解した。

「い…痛つ…。」

口の中を切つた。血の味が口の中に広がる。

「夏希つ…！」

美魅の声が夏希の耳に響く。

「……。」

痛い。痛くて怖い。

喧嘩なんてしたことがない夏希。痛くて痛くて涙が溢れてくる。

だけど…。

「止めて……夏希を殴らないで……私が悪かったから……！だから、夏希を殴らないで……！」

「やつと謝ったか。それでいいんだよ。糞女。あー、なんか興奮してきた。コイツ、俺達で回せやうぜ。胸が小さくて、無いのは仕方ないか。ギヤハハハ……！」

「ヤニヤヒ、男達は美魅の体を舐めまわすように見てこる。

「つ……く……穢らわしい……。」

「強がる女は、俺達の大好物だ。」

汚ならしく笑う男達。

美魅の胸ぐらを掴んだまま、何処かへ連れていこうとした。

「ま……待つ……て……！」

「あん……？」

夏希が、立ち上がった。

フラフラで、今にも倒れそうな体で立ち上がった。

「んだよ、まだ死んでなかつたのかよ。」

夏希を殴った男が、再び夏希の前に立つた。

「いい加減、死ねよ。」「

再び、夏希の右頬をぶん殴つた。が、まだだった。

「つ……ぐつ……放してください……。」「

「なつ……?」「

倒れなかつた。

口から血を流している。足はフラフラ。視界はぐちゅぐちゅ。だけど、倒れなかつた。

「美魅ちゃんを……放してください……!」「

夏希は、殴つた男に飛びかかつた。

「つ……うああ……?」「

いきなり飛びかかられ、バランスを崩した男は、後ろにおもいつきり倒れる。

そして、不幸にも……。

男はコンクリートに頭を激しく叩きつけた。

「つ……か……。」「

あっけなく氣絶した。

「はあ……はあ……。美魅ちゃんを……放して……ください。」「

残り2人を睨み付ける夏希。

「て、テメエよくもやりやがったなあ！！」

その残りの2人が、夏希に襲いかかるとしていた。

「いりあーー貴様ら何をしているーー！」

男の怒号が、道に響いた。

「へつ……？」

夏希の後ろから、2人の体格のいい警察官が、走ってきていた。

「貴様らあーー！」

「うわああーー！」

2人の男は警察官から走つて逃げた。

「君たち、大丈夫かい！？」

1人の警察官は男達を追いかけ、もう一人は夏希と美魅を保護しに残つた。

「は……い……。」

夏希はフランフランと、崩れるようにコンクリートに倒れた。

「夏希つーー？」

泣いていた美魅は、夏希に駆け寄った。

「夏希！…しつかりして…死んじゃ やだ…」

夏希を抱きしめて、美魅は更に泣いた。

「大丈夫。氣絶しているだけだ。でも、早く病院に連れていかないと。」

すると、若い警察官の男性は、無線で何かを話していた。

「夏希…。夏希い…。」

夏希の耳元で、美魅はすつと夏希を呼んでいた。

“ 夏希… 。”

闇の中で、美魅ちゃんの声が聞こえる。

何だか、出逢つてまだ1日も経つてないのに。  
ずっと前から一緒にいるみたい。

“ 気に入らない生徒がいたら、学校から消すんだぜ。 ”

…そんなことはない。

まだ美魅ちゃんの事、よく分からぬけど、美魅ちゃんはそんなことは絶対にしない。

美魅ちゃんは、優しい子です。ちょっと偉そつだけだ…。

例えるなら…。

“ 仔猫”かな?

いつも一匹でいて。

誰かが近づいてきたら警戒して。でも、自分から近づいて甘えてくる。

そんな感じがします。

皆怖がってるけど。

本当は美魅ちゃん、優しい子なんだよ…。

翌日、放課後。

誰もいなくなり、夕日が照らす教室。

「…美魅ちゃん？」

右頬にガーゼを貼っている夏希。あまりケガは無く、心配するほどではなかった。

だが、皆からは心配されて、夏希は困っていた。

そんな1日が終わり、夏希は帰ろうと思つたが、美魅に呼び出された。

“皆が帰つた後、教室に来なさい！！”と、言つていた。

約束通り、夏希は誰もいなくなつた教室に来た。

「美魅ちゃん？」

「遅い。」

美魅は、自分の席の椅子ではなく、机に座つていた。

「ゴメン…。」

苦笑いして、美魅に近寄る。

「……。」

美魅の顔が、紅くなつているのが分かつた。

何か様子がおかしい。

まだ出逢って2日で、こつものと並べばおかしいが、いつもの偉そうな態度ではない。

ちなみに、朝からそ「うだつた。

朝、教室で夏希は美魅に、おはようと挨拶した。すると、美魅は“お…おはよ…。”と、小さな声で返事をするだけ。しかも、顔を紅くして、口をモヤモヤしていたのだ。

「美魅ち

「夏希ち

もつゝ一回名前を呼ばぼうとした夏希。だが、美魅の声で止められた。

「は、はい…？」

美魅は突然、夏希の名前を呼び、深呼吸をした。

「い、いい？

一度しか言わないわよ…。」

「うん？」

スッと息を吸つて、美魅は言つた。

「私、アンタのことが…好きなの。」

「えつ…。」

一瞬、ほんの一瞬。  
2人の時が止まつた。

## 5、熱くて堅くて大きくて

「えつ……えええ！？」

教室に、夏希の声が響く。

「何よ……。」

「だ……だつて。まだ出逢つて2日だし……。」

「愛に時間なんて、関係ないのよ。」

自信満々に言う美魅。

言いたい事を言えたよつだ。さつきよつは、落ち着きを取り戻している。

だんだん、いつもの美魅に戻りつつある。

「つてか、そんなことまだつでもいいわよ……早く返事をしなさいよ！！」

だんだん苛々してきた美魅。

「え……えつと……。」

夏希もいきなりの出来事で照れているのか困っているのか。モジモジしていた。

「あの、急に言われても……困ります。」

「困ってるなんて、知らないわよ。私は、返事を欲しいの……」

グイツと美魅は夏希に近寄った。

「…あの時の夏希、とってもカッコよかつた。」

「えつ？」

「あの穢らわしい男達に、勇敢に立ち向かっていった夏希…。あの姿に私は、夏希を好きになつたの。」

「そ…そんな。」

夏希の胸が、ドキドキして暴れています。

「早く…。そんなに私を待たせないで。」

美魅は、夏希に優しく抱きついた。

「つ…。」

今まで、告白されたことは何度かあった。だけど、夏希にはあまり、いい思い出ではない。

だけど、今回は違う気がした。「こんなに可愛い子が、真面目に告白をしてきたのだ。

だけど…。

「「」「」めぐなせ」」。

「……。」

美魅がピクッと動いたのが分かった。

「美魅ちゃんは、可愛いです。」

「……当たり前よ。」

「う……で、でもね、まだ出逢つて2日だし、そんなに美魅ちゃんの事を知らないの。だから、もつと美魅ちゃんを知つてからじゃ、ダメですか?」

美魅の、夏希を抱き締める手が震えていた。

「私の」と…知りたいの?」

「あ、はい。そう言つとになりますね。」

夏希は笑つて、思わず美魅の頭を撫でた。

「じゃあ、教えてあげる…。」

突然、夏希はガクンと、バランスを崩した。

「へつ…。」

美魅に、優しく教室の床に押し倒されたのが分かった。

「み……美魅ちゃん……？」

美魅は倒れている夏希の上に覆い被さるよつて、乗つかった。

「私のこと知りたつて言つたじゃん。」

紅い顔の美魅が、すぐそこにある。甘い吐息が、夏希の鼻をくすぐる。

「で、でも……まだボク達高校生……。」

「クスッ……何を妄想しているのよ、Hロ夏希。」

意地悪く笑つている美魅。

「つつ……？」「

「でも……いいよ、夏希。私は、夏希に触つて欲しいな……。」

美魅は夏希の右手を掴んで、自分の胸に押し当てた。

「み、美魅ちゃん……？」

「「ゴメンね。私、胸無いの。やっぱり男の子つて、胸は大きいのが好きだよね……。」

「そ、そんなことないよ……！ボクは、胸が大きいとか関係なくて、優しい人が好きなの。」

「クスッ……。ありがとつ。」

美魅は優しく微笑むと、胸に押し当てていた夏希の手を、足元に移動させた。

「美魅ちゃん？」

「もう我慢できない…。“じっち”も、触つて…夏希。」

美魅は夏希の手を、スカートの中に突っ込んだ。

「ちょっと…！それ以上は…。」

「いいから、ちゃんと触つて…。」

美魅の強い言葉に夏希は抵抗できず、されるがままになっていた。

夏希の手はスカートの中へと、どんどん入つていいく。そして、とうとう美魅の一一番感じる場所へと到達した。

「んっ…。」

「っ…。」

手が触れた瞬間、美魅がピクッと体を振るわせる。

美魅のあそこは…。

“熱くて”  
“堅くて”  
“大きかった”

「へつ？」

“堅くて、大きい？”

夏希の手は、何かが“握られていた”。

“熱くて、堅くて、大きい”何かが…。

「んんっ…。そんなに…握っちゃ、ヤだあ…。

私の“おち”…壞れちゃう…。」

夏希の頭の中が、ぐちゃぐちゃにかき回される。

「美魅ちゃんに…ゾウさん…大きな…ゾウさん？」

午後16時58分。

水の都高校、2年3組の教室で、この世のモノとは思えない叫び声が響いた。

## 6、姉

「何よ、そんなに驚かなくてもいいじゃない。」

美魅は頬を膨らまし、教室の隅へと逃げた夏希を睨む。

「美魅ちゃんって……お…男の子…だったの…?」

「わうわう。」

わうわうと言つ美魅。

「私、自分が女だつて一度も言つてないけど?」

「で、でも…。セーラー服だし。」

「いいじやない。セーラー服も、制服でしょっだつて男の制服つて可愛くないもん。」

「うう…。」

美魅が、男の子。

信じられない事実だつた。

でも、確かに“アレ”があつた。触つた。男の子にしかない、“アレ”が。

「ねえ、もう触つてくれないの?」

美魅は頬を赤らめ、意地悪そうに笑つた。

「さ、触りませんーー！」

男同士は、そんなことしちゃいけないんですよーー?」

「そんなの知らないもん。」

美魅は教室の隅に逃げた夏希に近づく。

「ねえ、私のこと知れたでしょ。」

「えつ？」

「次は、私が夏希のこと知りたいな。」

美魅は再び、夏希に抱きついた。

「教えて。」

美魅は、自分の唇を夏希唇に近づける。

「夏希つて、ファーストキスまだだよね?私が、初めてになつてあげる。」

美魅はじつと夏希の目を見つめて、だんだんと近づいてくる。

「…つ、止めて…！」

夏希は大きな声を出して、震えていた。

「つ、夏希…？」

「「J...J...」めんなさ」。やっぱり、こんなことしちゃダメです...。」

夏希は美魅から視線を反らす。

「...男だから。」

「えつ？」

「男だから、拒否したの？」

私が女の子だつたら、キスしてくれたの...？」

美魅は夏希の胸に顔を押し付けていて、表情が分からぬ。だが、寂しそうな顔をしているのは分かつた。

「ち...違つ...」

「嘘つき。男だから嫌だつたんじよ。男同士がキスをするなんて、気持ち悪いんじよ。私のアソコを触つて、汚いって思つてるんじよ。」

「美魅ちゃん...。」

「だけど、これだけは言わせて。私、産まれて初めて男の子を好きになつたのは、夏希だけ。」

美魅は顔を上げた。涙ぐんだ顔をしていた。

「“あの日”から、私は人を好きになれなかつた...。だけど今、夏

希を好きになれた。絶対、諦めないんだから。たとえ、同性愛でも  
…。  
」

美魅はそう言つと、走つて教室から出でていった。

「…美魅ちゃん。」

教室には、複雑な気持ちの夏希が残された。

美魅の家。美魅の家は、よくある普通の一戸建て。美魅は、自分の部屋のベッドで大きなパンダのぬいぐるみを抱き締めながら、横になつていた。

「夏希…。」

わざわざから、夏希の事ばかり想つていた。

自分が男だといつことを打ち明けるのに、とても勇気が必要だった。

だけど、夏希の優しい笑顔を思い出すだけで、勇気が湧いてくる。  
だから、言えた。

どんな展開になろうとも、言えた。

「夏希…。」

ギュッと、ぬいぐるみを抱き締めた。ぬいぐるみを、夏希だと思つて…。

「美魅、帰つてたの？」

突然、部屋にノックの音が響いた。

「つっ！？」

美魅は突然のノックに驚き、ベッドから跳ね起きた。

「入るわね。」

ガチャヤツと扉が開き、女性が入つてきた。

女性は

真っ黒の長い髪。

身長は高く。

スタイルはとつても良い。

綺麗な顔立ちをしていて、どこかのモデルみたいだった。

女性は黒いスーツを着ていて、大人の女性だった。

「//サ-ト…お姉ちゃん。」

「ただいま、美魅。」

美魅の姉、ミサトは笑って部屋に入ってきた。

「どうしたの？ 今日は帰つてくるの早くない？」

「仕事を早く終わらせたの。 美魅に早く会いたくて。」

ミサトはベッドに座り、美魅に引っ付いた。

「み…ミサト？」

「仕事疲れちゃったわ。 美魅に癒してもらおうかな？」

ミサトは腕を美魅の腰に手をまわす。

「やつ…アド」触つて 。

「美魅、『愛してる』。」

ミサトは美魅の耳を舐めた。

「や…やめ…。」

力が抜けた美魅は、そのままミサトにベッドへ押し倒された。

「んつ…。」

ミサトの手が、美魅の服の中に入つていぐ。

「や……止めて……！……今日は、ヤだ……。」

美魅は涙を流して、ミサトの要求を拒否した。

「……分かつたわ。今日は止めてあげる。」

ミサトは美魅の頬にキスをすると、ベッドから立ち上がった。

「今から『飯の準備するわね。今日は、ハンバーグだから。』

そう言つて、笑いながら部屋から出ていった。

「つ……く……。」

ベッドの上で、ぐつたりしている美魅。泣いていた。

「つ……助けて……夏希。」

## 7、委員長

次の日。

「ん、ふわあ……。」

夏希は田舎ましに起こされ、重たいまぶたを無理やり開いた。

「学校……。」

夏希は少し嫌になつた。何故なら、美魅がいるからだ。

昨日の出来事で、夏希は美魅とどんな顔をして会えればいいのか、分からなかつた。

「うー。」

考えていても、時間がだけが過ぎていく。夏希は観念して、ベッドから出た。

夏希は今、独り暮らしをしている。この町に引っ越してきたのは、夏希一人だけ。

「朝、」はん、めんじくせ……。」

夏希は台所に向かわずに、洗面所へ顔を洗いに向かつた。

夏希の部屋は、簡単な造りである。

玄関を入ると、短い廊下がある。廊下を過ぎると、小さな台所があり、その奥に小さなリビング。

洗面所とトイレは廊下の途中にある。

ちなみに、お風呂は共用。男風呂、女風呂はアパートの地下にある。

家賃はなんと、月2万円。

学生の夏希にとつては、とっても嬉しい値段だ。

もしかすると、日焼け付きかもしない。

顔を洗い終わった夏希は、Tシャツとジヤージの寝間着から、学校指定の紺色のズボンに履き替える。

そして、今は衣替えの季節なので、カッターシャツの上に黒のカーディガンを羽織った。

「よし。行こう。」

今日は、水色の女物のリュックを背負い、玄関に行こうとした時だつた。

夏希の部屋に、チャイムが鳴り響いた。

「お姉さん…？」

夏希は首を傾げて、玄関に向かう。

鍵とチューーンを外して、扉を開けた。

「おはよつ。夏希。」

「…あれつ？」

扉の向こうにいたのは、赤い短髪の、夏希より背が高く、セーラー服があまり似合っていない、夏希のクラスメイトで委員長の、天水萤が立っていた。

「あ、天水さん？」

「む？ 何をそんな驚いている？」

「だ、だつて…。何でボクの家を知ってるんですか？」

「むむ？ まだ知らなかつたのか…。私の家は、君の隣の部屋だ。」

萤は、夏希の隣の部屋を指差した。

「えー？」

また驚く夏希。

「夏希がこのアパートに引っ越してきた時に、私は夏希を何回か見ていたのだ。

そして、学校に行つたら夏希が転校生でいたという訳だ。だからこの間、一緒に帰ろうと言つたんだ。」

「あ、納得しました。」

ポンッと、手を叩いて笑う夏希。それにつられて、螢も笑った。

夏希は部屋の鍵を閉め、螢と並んで歩く。

今日は一緒に登校のよつだ。

「天水さんも、独り暮らしなんですか？」

道を歩きながら、夏希は何気ない質問をしてみた。

「うん。独り暮らしだ。

水の都高校は実家と離れていたが、どうしても行きたい高校だったからな。

親に無理を言ひて、独り暮らし始めたのだ。」

「へえ。そうなんですか。」

夏希の瞳には螢が、かつてよく映っていた。

「夏希は何でなんだ？私と同じか？」

螢の質問に、夏希はちよつと暗い顔をして、黙ってしまった。

「あ、何か言いにくい事だつたか？すまない。」

「ううん。『めんなさい。まだちよつと、人には話せないんです…。』

「

悲しい田で、下を見ている夏希。

「まだ、心の整理がつこなくて…。」

「わづか、なら私はこれ以上聞かない。夏希から私に打ち明けてくれるなら、私はずっと待っているぞ。」

茧は夏希の頭を撫でる。

夏希は女の子みたいな男の子。茧は、ボーグッシュな女の子。

遠くから見ると、男女の立場が逆に見えた。

茧が男の子で、夏希が女の子なら、何の不自然も無いのだ。

「やつぱり夏希は可愛いな。守つてやりたくなんな。」

クスクス笑っている茧。

「か、可愛いーー??つてやりたいーー?」

男としてやつぱり、女の子にはカッコいいって思われたいし、女の子を守りたい。

茧の言葉に夏希は傷ついた。

「可愛いことといえば、春木さんも可愛いしな。」

董は何気なく言った。

「美魅ちゃん…。」

夏希は昨日の事を思い出した。

「ん？ 春木さんが、どうかしたのか？」

「な、何でもないです…。気にしないでください。」

「怪しい…。」

ジロッと夏希を睨む董。その視線に耐えきれなくなつた夏希は、とつたじて別の話題を出した。

「み、美魅ちゃんが男の子だつたんじゃないですかー！？」

「は？？」

ヤバい、と夏希は思った。美魅は自分が男だと騙していくはずだと思つたからだ。

だから、夏希はまた焦つたが。

「何を言つてゐる。春木さんは、男の子であります。」

「へーーー。」

董はまた前のように言つた。

「春木さんは男の子だと、学校にいる者全員知ってるぞ。まさか、夏希は知らないかたのか？」

「う、ううん！ 知つてた！ 知つてたよ！ あはは…。」

まさか、美魅が男の子だといつゝことが当たり前だつたとは…。

そんな時だった、2人の後ろから大きな声が聞こえた。

「あああ——！」

「えっ！？」

声は2人の後ろから聞こえたので、2人は同時に振り向いた。

「な、何で委員長が夏希と一緒にいるのよ！？意味分かんない！！」

後ろには、2人を指差して怒りで震えている美魅がいた。

# 一 美 魅 ち や ん ！ ？ 』

「む、噂をすれば何とやらだな。」

螢は笑つて、  
羨魅に手を振る。

「夏希……委員長から放れなさい……」

「えつ…？」

「いいから来なさいーー！」

美魅は夏希の腕を引っ張つて、自分に引き寄せる。

「何か…『デジャヴ』？」

夏希は呟いた。

## 8、キス

「ガルルッ！！」

美魅は夏希の腕に抱きつき、螢を威嚇していた。  
まるで、螢から夏希を守っているみたいだ。

「む、軽く傷つくな。」

螢は美魅の隣を歩いていて、苦笑いしていた。

「「うぬやこーーー夏希に変な」としたら私が許さないんだからーーー。」

「む、聞き捨てならんな。私は夏希に変なことをするつもりはない。  
ただ、一緒に登下校をしたいだけだ。」

ムスッと、螢はちゅっと怒った。

そんなやつ取りを見ていた夏希は、恐る恐る美魅呼んだ。

「み、美魅ちゃん…。」

「何ー?」

「つ、あのや…そんなに天水さんを怒りつけやダメだよ?」

「う…うぬやこうぬやこーーーから夏希は委員長に近づこりやダメーーー」

「さつきからそればっかりだけど…何で？天水さんはいい人だよ？」

「つ…だつて…。」

「だつて？」

美魅は顔を真っ赤にして、震えた声で言つた。

「夏希が、私以外の人と仲良くしてんなんて、嫌なの…。」

「つつ…！」

夏希も顔を真っ赤になつてしまつた。

「む、やはり2人は付き合つているのか？」

「ち、違いますよ…！」

夏希は必死に否定する。

「…。」

だが、美魅はずつと黙つたままだつた。

「夏希、ちょっと来なさい。」

「えつ？」

学校に着いて、夏希は教室でゆっくりしていたら、美魅が夏希の田の前に現れた。

「ちよつ…待つて…。」

美魅は夏希の腕を引つ張り、椅子から無理矢理立たせる。

そして、急ぎ足で「かく連れてこいつと歩き出した。

「み、美魅ちゃんー…。」

「……。」

美魅は夏希の言葉を無視して、階段を昇り始めた。  
階段の先には、屋上しかない。

普段、屋上の扉は鍵が掛かっているはずだが…。

「えつー？」

ガチャッと、普通に扉は開いた。

「「」の鍵、壊れてるのよ。覚えておきなさい。」

「は、はー…。」

美魅は夏希を連れて、当たり前のよつと屋上に入った。

「ふわ…。」

屋上に入った直後、優しい風が夏希を出迎える。

「うわあ…風が気持ちいい…。」

夏希は笑顔で空を見る。

「…ねえ、夏希。」

「あ、はい？」

美魅はギュッと夏希の腕を握り、真っ直ぐ夏希を見る。

「昨日の事…なんだけど…。」

「つづ…。」

夏希の胸がドキッとなる。

昨日の出来事が頭の中で繰り返される。

「告白の答え…昨日と変わらない?」

「…はい。」

夏希は優しく、返事をしたつもりだった。  
だけど、美魅の心はまた少し傷を負う。

「やっぱり…。だけど、私の気持ちも、変わつてないよ?」

美魅は、軽く夏希を後ろへ押す。

夏希の後ろは壁で、夏希は美魅に壁に押し付けられた。

「み、美魅ちゃん」

夏希の言葉は、美魅の“唇”によつて、邪魔された。

「つう…ー?」

美魅と夏希の唇が重なる。

夏希は突然すきて頭の中が真っ白になる。

「…。」

そんな夏希に気づいた美魅、田が意地悪な田に変わる。

「つーー?」

夏希の口の中に、美魅の甘い舌が入つてきた。

抵抗出来なかつた夏希は、美魅の侵入を許してしまつたのだ。

そつなつてしまつたらもつ遅い。夏希は美魅のされるがままになつてしまつ。

主導権は美魅が握つてしまつた。

「つん…んう…。」

「はあっ…。」

数分間、美魅は夏希の口を犯し、解放した。

「は、はう…。」

力が抜けた夏希は、ズルズルと口の床に座る。

「クスクス…可愛い。」

息が切れて、ハアハアと息をしている夏希を見る美魅の目は…いつもと違う、男の目だった。

「夏希…。」

美魅は座っている夏希を抱き締める。

「ゴメンね、急にキスしちゃって…。しかもティープ。」

美魅はクスクスと笑う。

「私の口の中を、夏希の味で“消毒”したかったの…。」

「消毒…？」

「ううん、何でもない。気にしないで。それと、私の事、嫌いになつた？」

美魅の心が、ドキドキしているのが分かつた。

「そんなこと言われたら…嫌いになれないじゃないですか…。」

「クスッ…ありがと。」

「でも、もういきなりキスするの止めてくださいね…。今度したら、本気で怒りますよ…。」

「ハイハイ。」

「う…本当に分かってるんですか…？」

「分かってるわよ。夏希は、男の子にドキドキしている変態さんだつて事。」

「なつ！？違つ…。」

「アハハハ！！」

美魅は笑つて、屋上から出ていった。

「あ…！待つて…！」

夏希も美魅の後を追いかけた。

## 9、仲良く

「一緒に食べるか？」

「へ？」

夏希と美魅が机を向かい合わせにくつ付け、皿<sup>さら</sup>はんを食べようとした時、螢が笑顔で弁当を持ってきた。

「い、いいですけど。」

「よかったです、ありがとうございます。」

螢は椅子を持ってきて、座った。

「うー。」

美魅は面白くなさそうな顔をして螢を睨む。

「またか。」

螢は弁当を広げながら、面白そうに微笑む。

「何よー?..」

「別に私は夏希を、とつて食べる訳ではないと、何回言えれば分かるのだ?..」

「だ、だつて?..」

「そんなに春木さんが、私に夏希を食べて欲しいなら、食べてやるが？」

「ヤリと、螢は笑う。

「だ、ダメ……」

美魅は机をバンッ！…と叩いて、乱暴に立ち上がった。

「美魅ちゃん？」

「はっ……。」

教室にいる生徒の目線が、美魅に突き刺さる。

「まつたく、面白い。」

クスクスと、螢は笑う。

「こつもピコピコしてくる春木さんが、こんなに面白い子だつたとは。」

「う、うるさい……トイレに行つてく……」

美魅は逃げるよつに教室から出でていった。

「…天水さん。」

「螢と呼んでくれ。もう私達は名字で呼び合つ仲ではないと思つて

いる。だから強と呼んでくれ。」

「やつですね。じゃあ“強わん”。」

「フフ。私は春木さんみたいに、“ちゃん付け”じゃないんだな。」

「だつて、強わんは“カツココ”じゃないですか。ちゃん付けは、何故が出来ないんです。」

「フフ。カツココ…か。」

「え?」

ちゅつと強じそつな顔をする強。

“カツココ…女の方は“可愛い”と呼ばれたいものだ。

「で、私に何か用か?」

「あ、そうでした。」

夏希は強に質問があるようだ。

「強わんって、魅せちゃんの“友達”ですよね?」

「むへへかといえば、私は春木さんの“友達ではない”。」

「え?」

強はひよつと困つたような表情になつた。

「私と春木さんは、あまり話さない。それに、春木さんがあまり人と好んで話そうとはしないのだ。」

「そりなんですか…。」

夏希は少し寂しそうな表情をしている。

夏希は密かに、不思議に思っていた。疑問に思っていた。

美魅が、夏希と蛍以外の人と喋っているところを“見たことがない”と。

美魅と出逢つてまだ3日で、完全に美魅を知っているわけじゃない。だけど、夏希は気づいた。気づいてしまった。間違いだと思ったかつた。

美魅には…“友達がない”。

そんな寂しそうな表情をみていた蛍は微笑むと、夏希の頭を撫でた。

「…蛍さん？」

「夏希が、今何を考えているのか…何となくだが分かる。」

「え…？」

「確かに、春木さんには親しい友人がいない。委員長の私には、よ

くわかつていてる。私だつて、何回か春木さんと親しくなるつと、会話を試みたが…。」

蛍は苦笑いをして…。

「全て逃げられてしまつた…。」

美魅からの、完全な拒絶。蛍はどんなに傷ついただろ？

「だけど、私は諦めない。せっかく、“君”という、きっかけが現れたんだから。」

蛍は、撫でていた手を夏希から放して、笑顔で見つめた。

「ボ、ボク！？」

「そつだ。君が転校してきて、春木さんの表情が変わつた。」

「で、でも…ボクが転校してきてまだ3日ですよ…？そんなすぐには変わるものですか…？」

「田にちなんて関係ない。必要なのは、気持ちなんだ。君には“優しい魅力”がある。それに触れた春木さんは、君に心を開いたんだ。」

「

蛍は、本当に嬉しそうに話す。

「それなら私も、夏希に負けてられない。私も、夏希と一緒に、春木さんと仲良くなりたい。」

夏希も何故か、嬉しくなった。理由は分からない。だけど、嬉しくなった。

「なれますよ……螢ちゃんは優しくてカッコイイですから、美魅ちゃんはさきつと心を開いてくれますよ……」

「ありがとうございます。」

2人はお互いに笑い合つた。

「あ、そうだ。」

「ん? どうした。」

「へへへ。螢ちゃんは、美魅ちゃんを名字で呼んでるじゃないですか。」

「うむ。 そうだが……。」

「名前で呼んでみたらどうですか? 仲良くなるための、最初の一歩です。」

「わつ……だな。呼んでみようかな……。」

螢の頬が、少し赤らむ。

「あ、美魅ちゃん帰つてきましたよ……。」

美魅が、ちょうど教室の扉を開いて、入つてくるところだった。

美魅の手には、ペットボトルのお茶が握られていた。  
トイレに行つたついでに、お茶を買いに行つて いたようだ。

「な、何よ… 2人とも。私がどうかしたかしら？」

美魅は、何かしら空気が変わった2人を見て、ちょっと怖かった。

「ん、んんっ。」

美魅が席に戻つてきたと同時に、蛍は喉を鳴らした。  
少し緊張している。

「…どうしたのよ、委員長？ 何があつたの？」

蛍の様子がおかしいのに気づいた美魅、お茶を飲みながら蛍を見て  
いた…

「な、何でもないぞ“美魅タン”…！」

「ツツブツファ…！ ゲボツゲーツホ…！ ぬぐうあ…！ オエ…グホ  
…！」

美魅の口から茶色い綺麗な霧が吹き出して、椅子から転げ落ち、机  
に頭を打つて、その衝撃で机の中に入つていた教科書類が美魅の頭  
に落ちてきた。

「美魅ちゃん大丈夫！？」

「大丈夫か！？」

2人は驚いて美魅に駆け寄る。

クラスにいる生徒も、何が起きたのか気になつて、こつちを見ている。

「み、み、美魅タン！？何！？タンって何！？タン塩！？タンタン麺！？」

「すまない、噛んでしまった。」

テヘッと、螢は自分で頭を叩いた。

「ウザツ！…つてか、そんな噛みかたしないわよ…アンタわざとでしょ！？」

「む、ちょっとした戯れではないか…。」

美魅はヨロヨロと、自分の席に座りなおす。夏希と螢も笑いながら座りなおした。

「…で、何よ。」

「む？」

「突然私を名前で呼ぶなんて…。何の心境の変化？」

「うむ…それはな…。み、美魅と仲良くなりたくて…。の。」

カアアと、螢の顔が赤くなる。

「でも直球に言つて、螢ははずかしくなつてしまつたよつだ。

「つ…！？な、何恥ずかしい事を言つてんのよ…こんな大勢いる場所で…。」

美魅の顔も、赤くなつた。  
恥ずかしいようだ。

「む、む…すまない。だが、今言わないと、一生言えない気がするのだ。」

苦笑いをして、美魅を見る螢。

「もちろん、構わないよね？美魅ちゃん。」

夏希はニヤニヤと、楽しそうに笑つていた。

「そりゃ…アンタが根回ししたのね…。」

美魅はため息をついて、また顔を赤くした。

「わ、分かつたわよ…。そこまで言われたら、仲良くしても…いいわよ。」

「そりゃ…！…ありがと…！」

「…」「…」

「…」

美魅はさりげなく、顔を赤くさせた。

「よかったです、螢さん。」

「ああ。ありがとうございます、夏希。」

## 10、デパートへGO

「明日、デパートに行きましょ。」

「えつ？」

放課後、夏希と螢と美魅の3人が一緒に帰つていると、突然美魅が笑顔で言った。

「行くのは駅前のデパートかの？」

「そうよ、さすが委員長。察しがいいわね。」

フフンと、鼻を鳴らして夏希を見た。

「で、行くでしょ？ 明日。」

「明日…か。確かに明日は土曜日で学校は休みですけど…。」

夏希的には、土日はゆっくりしたかったのだが。

「んー！？ 行かないの！？」

「行きます…。」

「フフーン、それでいいのよ。」

夏希の背中をバシバシ叩いて喜んでいる美魅。

その隣で、螢が田を輝かしていた。

「わ、私も行つてよいかの！？」

「え？ 私は、そのつもりだつたんだけど……。」

「本当か！？ 嬉しいぞ！…」

「つ… 特別なんだからね！？ 本当は、夏希と2人きりがよかつたの…！」

すると、だんだんと美魅の顔が真っ赤になつていく。

「 美魅ちゃんつて、素直じゃないですよね～。」

クスクスと笑つている夏希。

「 つぬせーーー！ バカつーーー！」

翌日、駅前。

「 ふむ、美魅はどこじや？」

「駅前にある、噴水前つて言つてましたけど…。」

夏希と蛍は、とても広い駅前の噴水の近くにいた。

夏希は、太股までの長さのジーパンを履いていて、真っ白な半袖のパークーを着ていた。

綺麗な長い黒髪に似合っていた。

蛍はデニムのハーフパンツを履いていて、オレンジ色の半袖のTシャツを着ている。

「おーい…コツチコツチ。」

「あ、美魅ちゃん…。」

すると、近い距離から美魅の声がした。

少し離れた場所から、美魅が駆け足で、こっちに来る。

美魅は、とても可愛い格好をしていた。

ピンクのワンピースを着ていて、可愛い文物のサンダル。長い髪を1つに纏めて、ポニー テールにしていた。

「2人とも遅い…。」

「「」「」めぐなさい。」

夏希は可愛い魅方に、ちゅうと、ときめいてしまった。

「魅方は男だぞ。」

ボソッと、夏希に耳打ちをした。

「わ、わかつてます……」

「ん? どうしたのよ2人とも?」

「う、ううん……何でもないです……」

「やつ? だつたらいいけど。それじゃ早速、行きましょ……」

魅方は、さりげなく夏希の手を握り、駅前にある大きなデパートを指差した。

「キヤー……これ可愛いな……ねえ委員長、どう思つ? 」

「む、それを言つながら、いつのまつが可愛いぞ。」

キヤツキヤと、デパートの中にある女の子の服屋。

美魅と蛍は、はしゃいでいた。

それを後ろから見て いる夏希。男の夏希はついていけていない。

「… 美魅ちゃんも男の子なのに…。」

今思えば、おかしいのだ。美魅は男なのに、何でこんなにも“女の子”なんだらうか。

美魅自身は、自分の事を男だと自覚しているのに。

「ちよつと夏希…聞いてるの…?」

「えつ…?」

突然、美魅と蛍が目を輝かして「ちを見ている。

「な、何ですか?」

「…うちに来なさい…」

「え…ええつ…?」

夏希は美魅と蛍に連れていかれた。

「キヤー…可愛いや…」

「うむ。」

2人はまじまじと、試着室の中を見ていた。

試着室の中には…。

「あ…あの、何か間違つてる気がするんですけど。」

顔を真っ赤にし、白いワンピースを着た、夏希が立っていた。

「うむ、夏希は今日から、“夏希ちゃん”だの。」

「な、夏希ちゃん…？ボクは男ですよ…？」

「いいじゃない、今日はそれで過ごしなさいよ。」

意地悪な田で夏希を見ている美魅。その手には、夏希の服があつた。  
「な、何を言つてるんですか！？ってか、いつの間にボクの服を…？返してください…！」

「返すわけないじゃない。夏希は、今日一日その格好で過ごすのよ。」

「

「グッショブじや、美魅…！」

横で幸せそうに見ている美。一番喜んでいるように見えた。

「さつき、2人で服を選んでいたのは、この為だったんですね…。」

「やつよ、わづ金払つやつた。」

自慢気に胸をそらす魅惑。

「ええっ！？ 扱っちゃつたんですか！？」

「観念なさい！！」

「デパートに、夏希の叫び声が、響いた。」

## 1-1、救世主は……

「ほり、早く…… “夏希ひかり”」

「う……う」

「可愛いぞ、夏希」

3人は今、デパートにある、ゲームセンターに来ていた。勿論、夏希は女装をしたまま。

「うちに新型のプリクラがあるのよねー」

夏希と違つて、軽い足取りでゲームセンターの中を歩く。

「ふ、プリクラー？」

「やつよ、しかも全身撮れるやつ」

「ヤニヤと笑つてゐる美魅。夏希後ろでは、並もニヤニヤしてゐる。

「あー…… あつたあつた、これこれ…… ほら、2人とも早くしなさい……」

美魅は目的のプリクラ機を見つけてはしゃいでいる。

「ううと、やつぱり待つて下さい…… せめて、今日着てきた服に着替えてからにしてください……」

「何言つてんのよ。それ着てないと意味無いじゃない」  
夏希は最後の抵抗を見せるが……。

「意味無いって……蚩さんも、何か言つてくださいよ」  
「夏希は蚩に助けを求めるが。

「金なら私が払つてやる。安心するのだ」

蚩はグッヒ、親指を上げて微笑んだ。

「何が安心なんですか。鼻血出でますよ」

「む、すまない。ついつい興奮してしまつて……」

「……帰ります」

身の危険を薄々感じ始めた夏希は、ゲーセンから出でてこいつとした。

「まあまあ夏希ちゃん。女同士、仲良く撮らつよー」

「ボクと美魅ちゃんは男の子ですー。」

「つむりひこなあ……。まだぐちやぐちや言つただつたら、女装姿の夏希ちゃんの写メを、ネットに流すよー。」

「こつ撮つたんですかー？」

「えつ？ 今」

パシャッヒ、シャッター音が響いた。

「…………めんここのう」

鼻血を滴ながら、携帯のカメラで夏希を撮る变态もとて、茧の姿がそこにはあった。

「うわああーー？」

夏希は急いで茧の携帯を奪いに行くが……。

「送信」

「へつーーー？」

動きが止まった夏希の後ろで、美魅の携帯が鳴った。

「つと、やっぱり可愛いわ

美魅は携帯の画面を見てニヤニヤしていく。

唚然としている夏希の肩に、ポンッと、優しく茧の手が置かれた。

「THE・流通！」

「うわあああああーー！」

「はあ……」

夏希はまだ女装をしたまま、プリクラの近くにあるベンチに座っていた。

結局、夏希は2人と一緒にプリクラを撮るハメになつた。

今思えば、写メを撮られるのとプリクラを撮るのは、画像が残るので、夏希は更に首を絞められたのでは……。

あの2人は今、プリクラの落書き機能で、落書きをしている最中だつた。

なにやら、更に不吉な予感がするが、気のせいにした。

「はあ……」

もう一回、夏希はため息をついた。そんな時だつた……

「ねえねえ、君一人で何してるの～？」

「えつ？」

うつむいていた夏希は、知らない声に声をかけられたので、顔を上げた。

そこには……。

「う……」

「おお、マジ可愛いじゃん

「声かけて正解っしょ?」

チャラチャラした格好の、男性が4人……夏希を囲んでいた。  
……絡まれた。

「君名前は?」

「な、夏希……です

「夏希ちゃんかー、可愛いねー。びづ~、1人ならさ、俺らと遊ぼ  
うぜ」

「えつ……あ、違つ……」

「まじまじ、早くー!」

グイッと、夏希は腕を掴まれて、強制的に立たされた。

「い、痛つ……」

「何処に行こつか~?」

「とつあえず、俺の車でどつかに行くべ

「いいねー」

“車”とつ単語に、夏希の背筋がゾクッと反応した。

「イツらの車に乗れば、とんでもない事になつてしまつと、心の何処かで叫んでいた。

「ほり、行くよ」

男は夏希を引っ張り、無理矢理歩かせる。

「や、やめて……」

夏希は抵抗しようとしたが、チャラチャラした男の方方が強い。

夏希はそのまま呆気なく、ゲーセンから出してしまつた。

「駐車場つて何処？」

「あつちじやね？」

もつそろそろ、後戻りが出来ない状況になつてきた。  
こつなつたら、“助けて”と、大声で叫ぶしか……

「あ、あー……こんな所にいたんやな。搜したでー……」

「ああ？」

ひょいと、おどおどしながら男達の中に入つてきた1人の人物。

黒い野球帽を深く被り、顔が少し分かりにくい。  
背は夏希より頭ひとつ分高い。

声だけでは、男か女か分からぬ声だった。  
ダボダボのジャージをだらしなく着ていて、一見不良に見えるが、  
雰囲気が弱々しい。

「ほな行くで。今から買い物するんやろー？」

「えつ……あ……」

野球帽を被つた人物は、夏希の手を優しく握り、そのまま男達から連れ去つた。

「チツ、何だよ……男連れかよ。つまんねえ」

「先に言えよな、胸くそ悪い。リア充なんか爆発しちまえ」

男達は案外呆氣なく夏希を諦め、何処かへ行つてしまつた。

「あ、あの……」

夏希はまだ胸がドキドキしてて、落ち着いてないない。しかし、助けてくれた見ず知らずの人に、お礼をしたかつた。

だが、野球帽を被つた人は、夏希の方を見ずに、夏希の手を引っ張り、ツカツカと歩いている。

すると、突然、野球帽を被つた人は、デパートのあちらこちらに設置されたベンチを見つけるやいなや、夏希の手を放して……座つた。

「ハーツ……」

「えっと……あの……」

野球帽を被つた人は、ぐつたりと疲れたように、背もたれに身を任せた。

夏希は、野球帽を被つた人の前に立ち、オロオロとしている。お礼を言いたいが、何やら言えない状況のよつた気がした。

だが、夏希はグッと覚悟を決めて……言つた。

「あ、あの！ 助けていただいて、ありがとうございました！」

夏希は頭を下げる。  
フルフルと、身体が何故か震えていた。おそらく、まだ先程の恐怖が消えてないのだろう。

すると……。

「……お嬢ちゃん。名前は？」

「えつ……」

夏希は思わず顔を上げてしまった。

野球帽の人は、夏希に微笑み、優しく見つめていた。

「な、夏希です……。雨宮 夏希です」

「夏希ちゃんか、いい名前や。あ、ウチの名前は、白木 じゅき 竜也 たつや や。」

普通に、竜也って呼んでくれて構わんよ~」

今度は「ひー」と笑い、緊張している夏希を落ち着かせた。

「ほひほひ、そないな所に突つ立つてやんと、ひーに座り

竜也は、自分の隣の空いたスペースをポンポン叩いた。

「は、はー~」

夏希は竜也の隣にひよこんと座る。  
思わず夏希の顔が、笑顔になつた。

「夏希ちゃんは、何歳なんや?」

「16歳です。竜也ちゃんは……?」

「ウチは18歳。この近所の、"水の都高校"に通つとる

「えつー? 竜也ちゃんですかー?」

「ひー」とは……夏希ちゃんもか?」

「はー~」

先程の恐怖も何処かへ行つてしまい、心には嬉しさと喜びで溢れていた。

「ははっ、奇跡に近い偶然やなあ」

「ふわ……」

ポンッと、竜也は夏希の頭に手を置き、軽く頭を撫でた。

「うう……」

竜也に頭を撫でられた夏希は、何故かドキドキしてしまっていた。  
それに、顔も熱い……。

「ん？ どないしたんや？」

竜也は、様子がおかしい夏希を心配して、顔を覗きこんだ。

「な、な、なんでもないです！」

「さあか？ でも、顔赤いで？ 風邪ひいたんじやうか？」

すると、突然竜也は……夏希に顔を近づけた。

「くっ？」

夏希が理解するまで、少し時間が掛かった。

竜也は、自分の額と夏希の額を……くっつけた。  
鼻先が互いに当たり、視界のほとんどが竜也だった。

「うーん……熱はないなあ」

「つあ つーーー！」

声にならない声が、夏希の口から出た。

更に顔は真っ赤になつていぐ。  
そして、ドキドキも止まらない。

このままでは、竜也にドキドキしてしまつてことバレてしまふ

「うひ、あああーー！」

「んつ？」

「“私の”夏希に向してんだあああーー！」

竜也の背後から怒吼と殺氣。  
そして

「 つじぶつーー？」

突然、誰かに首根っこを掴まれ、ものすごい力で夏希から引き離され、ベンチから引きずり落とされた。

「うつうつ……な、何やねん！ いきなりけつたいなー」としゃが……つて……」

地べたに腰を強打し、痛みで腰を擦りながら、竜也は後ろを振り返つた……。

「けつたいな？ 私には貴方がけつたいな人間に見えるんだけど？ 気のせいだといいなあ……ねえ？」

竜也の背後に立っていたのは、どす黒いオーラを纏いし、鬼のよつな形相で竜也を睨む、美魅がいた。

「み、美魅ちゃんーー？」

夏希はよつやく我に返り、状況を理解した。

「もう大丈夫じゃ。安心せい、夏希」

すると、突然夏希の肩に、ポンッと手が置かれた。

「蚩也んーー？」

夏希の後ろから現れたのは、蚩だつた。

「すまぬ。夏希を一人にするべきでは無かつたな……。まさか、このよつな輩に絡まれるとば」

蚩は、竜也を穢いものを見るよつな目で見下していた。

「ああーて……私の夏希に手え出そつなんて、いい度胸のある獸を、どつ料理しようかなあ……」

美魅の目が、血走つていた。

「ひ、ひやあああーー！」

竜也はガクガクと身体を震わせ、美魅を完全に恐れていた。

「ま、待つてください！ 違います！」

「え？」

夏希の一言に、蛍と美魅は首を傾げる。

「竜也さんは、ボクが変な男達に絡まれてた所を、助けてくれたんですね！」

「そ、そつなのか……？」

蛍は、少し驚いた表情で竜也を見た。

「せやー、ウチは、夏希ちゃんを助けたんやー、夏希ちゃんを絡んでたなんて、濡れ衣やー！」

少し怒りを見せた竜也。

竜也はフラフラと、立ち上がった。

「大丈夫ですか？ 竜也さん」

夏希は蛍から離れて、竜也に駆け寄る。

「おー、大したことあらへん。ありがとな、夏希ちゃん」

竜也は、夏希の頭を撫でた。

「ちよつと……竜也さん……恥ずかしいです」

「そりなんか？ 力ハハ、夏希ちゃんは可愛いなあ」

「か、可愛いいくないです！」

イチャイチャしているように見える2人。

そんな2人を面白くなさそうに見つめる1人の人物。

「なにこれ……どうしてこうなったの？」

「……魅？」

魅の目に、光が無い。

隣で魅を見ていた螢が、魅を見て少し恐怖を覚えた。

「ムカつく……ムカつく……！」

魅は怒りながら竜也にズンズンと近づいた。

「ちょっとアンタ！」

「ん？ なんやあ？」

「この私の目の前で、帽子を被るな！ 調子に乗るな！ 脱げ！」

パンシソッと、魅は竜也の帽子を叩き落とした。

「つ……？」

帽子は呆気なく竜也から離れ、床に落ちた

「……えつー?」

この場にいた人間は、思わず驚きの声を漏らしてしまった。

まるで、小さな帽子の中に封印されていたが如く、『綺麗な金色の長い髪』が、現れた。

「た、竜也さんって……」

夏希達の田の前に立っている竜也は、先程の竜也ではなかった。

まず田に立つのは、綺麗な金色の、髪が肩まであるサワサラした髪。  
水色の綺麗な瞳。  
美白で柔らかい肌。

どこからどう見ても、女の子だった。

「ウチは、ハーフやねん」

「デパートの中にあるファミレス。よくあるような内装だった。」

4人はそこにいた。

4人座れるテーブルとイス。

美魅は夏希の隣に座り、向かい側に、竜也と螢が座っている。

「おじいちゃんが日本人、おばあちゃんがアメリカ人。その2人から生まれたのが、親父。んで、親父はアメリカ人の母ちゃんと結婚したんや」

竜也はドリンクバーのジュースを飲みながら言った。

「よつ分からん家系やろ?」

竜也はニヤニヤと笑つてゐる。

「や、そんなことないですよー。ちよつヒビックリしましたけど…。それに、竜也さんは……さ、綺麗ですからー。」

「カハハ、何や突然。おだても、何も出やさで？」

「おだててなんかなーですよー。本当のことを言つたんです……」

「口づまこなあ、夏希ちやん。女の子からモテモテやるおへ.

「そんなことないです……ー。」

ずっと夏希のことを女の子だと思つてた竜也に夏希は、竜也に自分は男だと打ち明けていた。

ついでに、美魅も男だと打ち明けた。

なかなか信じてくれない竜也に、信じてもうひとつ時間がとれなかつた。

ちなみに、まだ夏希は女装をしたままである。

「しかし、竜也先輩……なぜそのような格好をしておるのですか?..」

俺はずっと気にになつていた。

「なぜつて……何ぞう思つてや?..」

「いや……それは、そのような綺麗な容姿をしておるのに、わざわざ姿を隠すような格好をしていれば、気にもなりますよ」

「カハハ、やつぱりな。言つ思たわ」

竜也は帽子を深く被り、ため息をついた。

「ウチ、こんな性格だから、外見と中身にギャップがありすぎて、

嫌やねん」

すると突然、夏希と美魅を見つめた。

「な、なによー?」

美魅は竜也を睨んで、夏希の腕に抱きついた。

「いや……ウチな、男に生まれたかつてん。せやから、夏希ちゃん達……男の子に憧れんねん」

「だから、男の子みたいな格好をしていんですか?」

夏希は真っ直ぐ竜也を見つめて、竜也を理解しよ'うとしている。

だが、この中で一番、竜也を理解が出来るのは……。

「せや、ここの格好やつたら、誰もウチのことを気にかけん。注目もされへんのや」

竜也は笑っていた。

しかし、その笑顔の裏側では、いつたいじれほじの苦労があつたのだろうか。

本当の自分を出せずに、変装することににより、身を守つてきた。

「ほ、ボクは構いません!」

「夏希ちやん……?」

夏希は頬を赤らめて、竜也を見つめる。

「ボクは、竜也さんの本当の姿が好きです。だから、ボクと一緒にいるときは、本当の竜也さんでいてくれて構いませんから！」

まるで、愛の告白みたいだ。

そして、夏希の言葉を聞いている美魅が、どんどん不機嫌になつていく。

「カハハ、嬉しいこと言つてくれるやないか夏希ちゃん。お姉さん、惚れてしまわ」

「……つ」

竜也の何気ない冗談に夏希は、また顔が赤くなつた。

冗談だと分かつていたが、何故か胸がドキッと、熱くなつた。

「馬鹿じやないの？」

「み、美魅ちゃん！？」

突然、美魅は竜也を見下すように睨み付けた。

「さつきから黙つて聞いてたら、勝手にベラベラベラベラと……腹立つ女ね」

「ちょっと美魅ちゃん！ 何を言つてゐのー？」

「夏希は黙つてて！」

「つ……」

美魅の睨みに、怯む夏希。

夏希が黙つたのを確認した美魅は、あらためて竜也を睨み付ける。

「アンタ、ムカつくのよ……。夏希をヤンキーから助けたからって、夏希に馴れ馴れしく喋っちゃつてや……。調子に乗んないでくれない？」

美魅は気に入らなかつた。

夏希が自分以外に笑顔を見せていく事が……。自分以外の人間に、今まで見たことない、眩しい笑顔を見せていく事が……。  
そして何より、竜也が“綺麗な女性”だということが、  
気に入らなかつた。

女性であるといつことは、夏希がいつか、竜也に恋愛感情が生まれてしまふかもしれない。

自分は“男”だから……どんなに着飾ろうが、どんなに女らしくしようが、“男”なのだ。

だから……“気に入らない”。

「カハハ！」

「な、何が可笑しいのよー？」

美魅の挑発に、竜也は笑つていた。怒りも、戸惑いも感じず、笑つていた。

「カハハ、美魅ちゃんも可愛いなあ。よつほど夏希ちゃんを、とら

れたくないんやね~」

「うう……ー」

美魅は図星を言われて、顔を真っ赤にさせた。

「安心しこや、夏希ちゃんは美魅ちゃんのモノやで。カハハー！」

「う……！？ 竜也さんー 何を言つてるんですかー…？」

「お似合こやで、お一人さん」

竜也は笑つて、立ち上がつた。

その手には、伝票。

竜也は伝票をヒラヒラさせて言つた。

「んじや、ウチ帰るわ。楽しかつたでー。あ、ここのは奢つたりやるわ~。先輩やからね」

「あ、竜也さんー 待つてくださいー！」

夏希は席を立ち上がり、竜也の後を追つた。

「美魅ちゃん、強さん、今日はありがとうございました！ また学校で！」

夏希は笑顔で頭を下げ、すぐに竜也の後ろを着いていった。

「あ、夏希……ー」

美魅は、夏希を追おうとしたが、何故か身体が動かなかつた。まるで……美魅は竜也と夏希の仲に入り込めない……そんな気さえした。

「美魅？」

様子がおかしい美魅に、蚩は心配していた。

「何よ……夏希の奴……今日会つたばかりの女に軽々着いていつて……」

落ち込んだ表情。

独りぼっちになつたような顔。

今にも泣き出しそうな……。

「心配するな美魅。竜也先輩は悪い人じやない」

「分かつてゐるー」

「じゃあ、何故そのような顔をする?」

「……分かんない……分かんないの！ 何かムカムカして、イライラするのー……あの女、嫌い！」

「むう……」

竜也に夏希を捕られるのではなく、夏希が竜也を好きになつてしまふ可能性がある。

そうなつてしまつたら……夏希は美魅を見なくなつてしまふ。夏希と一生、繋がることはない。

それが、不安だった。  
嫌だった……。

「帰る……！」

美魅は荷物を荒々しく持ち、ファミレスから出ていった。

「もう……困ったのう。ああなつてしまつたら、機嫌がなまるのに、時間がかかつて……」

竜は頭を搔いて、うーんと困っていると、視界の端に何やら見覚えのある物が映つた。

「つ……これは！？」

美魅が座っていた席に、“夏希の服”が置き忘れられていた。

「あ！ 夏希のやつ……女装したまま竜也先輩を追いかけてしまつたのか……。美魅も美魅で、怒りでそのことを忘れおつて……」

竜は2人に対してため息をついた。

「夏希の家が隣で良かつた……今晚、届けてやるか」

竜も、夏希の服を持ち、ファミレスから出ていった。

「夏希ちゃんの家は何処や?」

「駅から歩いて、数分ですが……何ですか?」

竜也と夏希は、駅の周辺にいた。  
仲良く歩いてこむ。

「また悪い奴らに絡まれたらアカンやろ? 家まで見送つたるわ」

「そ……そんな、悪いですよー。」

「何言つとねん、そんな格好しどつたら、また絡まれんで?」

「うう……」

夏希は、竜也に言われるまで女装していくことを、忘れていた。  
急いで服を取りに行こうとしたが、董から、今日の夜に家に届けに行くと、メールがあった。

夏希は今すぐに、手渡して欲しかつたが、竜也に迷惑をかけないと、2人つきりになりたいという気持ちがあった。  
だから夏希は、そのまま帰ることにしたのだ。

「でも……わざわざ家まで……迷惑じゃないですか?」

「迷惑やつたが、こんなこと自分がから言つつか?」

「い、言わないです……」

「じゃあ、やつぱつ！」

竜也は一矢報いと、夏希の隣を歩く。

「竜也さん……優しいですね」

「ん？ わおか？」

「だつて……不良からボクを助けて、ファミレスも奢ってくれて、更には家まで送ってくれるなんて……優しすぎます」

夏希の胸の高なりが、どんどん大きくなつていぐ。

「あの……竜也さん。これからも、ボクと仲良くしてくれますか？」

火照った表情で、竜也を見つめる夏希。  
そんな夏希をまともに見てしまつた竜也は……。

「う……な、夏希ちゃん？」

竜也は、胸がドキッとしてしまい、簡単な答えを書つタイミングを逃してしまつた。

「やつぱつ……ダメですか？」

驚いている竜也を見て、目に涙が溢れてきた……。  
今の夏希は、心が弱くなつていて。

小さな女の子みたいな心……シャボン玉よりも弱い心になつていて。

「い、いこに決まつたやん……！ 夏希ちゃんみたいな、可愛ら

「こ子と仲良くなれるなんて、こちからお願ひしたこへりこやで  
！ カハハッ！」

「つ……嬉しい……です」

「カハハ！ なんや、夏希けやんホンマに女の子みたいやなー」

竜也は夏希の頭を撫でた。

ワシャワシャと、少し荒っぽく撫でた。

いつもは、女の子扱いされるのが嫌いだつた夏希。しかし、竜也に  
そんな扱いをされても、嫌じゃなかつた。  
むしり……可愛らしいと言わされて、嬉しかつた。

2人はしばらく歩き、夏希の住むアパートに着いた。

「あ、ここですか」

夏希はアパートを指差した。

「“翠月荘”……か、何か凄いアパートやなあ」

「家賃が安くて、安いのに中がとても綺麗なんですよ

一匹一匹としている夏希。

「……が、とても気に入つてこるよつだ。

すみと……。

「あー！ 夏兄いー！」

ダダダッと、後ろから夏希達に向かつて足音が聞こえた。

「お帰りい！」

「うわつーー？」

夏希が振り返った瞬間、夏希の胸の中に、夏希よりも少し小さな人が飛び込んだ。

「夏兄いー……ひにゅー」

夏希の胸の中に飛び込んできた子は、女の子だった。  
セーラー服を着ていて、半袖から飛び出すように伸びている細い腕や、  
スカートから出た細い足。  
長さが首まである茶色の髪。

背中には、テニスバッくを背負つている。

「さ、さくら 桜ちゃん？」

「夏兄いー……いー一オイがするー」

「う……一オイなんて、嗅がないで……」

「その子は……？」

まだ驚いている竜也は微笑んで、夏希に質問した。

「あ、すみません。」の子は、翠月荘の大家さんの、娘さんなんです。ほら、桜ちゃん。」人は、ボクの学校の先輩

「先輩……？ つて」とは、夏兄いの、友達？」

「うん。 わうだよ」

それを聞いた桜は、夏希から離れて、竜也の前に立つた。

「はじめまして。水の都中学校二年生、花葉 桜つていいま～す」

ペコッと、頭を下げる桜。

竜也も頭を下げる。

「ウチは、白木竜也。」つ見えて、一応女や

「じょ、女性！？」

桜は目を丸くして、口をポカーンと開けた。

「カハハツ！」

竜也は、桜の反応に少し気持ち良さうに笑っていた。

「てっきり、夏兄いの彼氏かと……」

「ちよつ……桜ちゃん！？」

「だつて夏兄い……そんな格好してるから、とうとう女の子に目覚

めたのかなあって……

「違つ……」しれは友達に無理やり……

「はいはーい。お話は、後でじつへり聞くからねえ。早く家に入ろ  
ーよー。格ゲーして遊ばーー。」

グイグイと、夏希の腕を引っ張る桜。

「カハハ、夏希ちゃんはモテモテやなあ。ほな、邪魔者は退散する  
わ

「あ、すみません竜也さん。ここまで送つていただいて……

「ええよーん。ほな、また用曜日で会おなー」

竜也は手を振つて、夏希達に背を向け歩き出した。

「竜也さん、今日は本当にありがとうございましたー。」

夏希の声に、竜也は手を擧げ、そのまま帰つて行つた。

夏希は、竜也の背が見えなくなるまで、ずっと見ていた。

### 13、恐るべし

“休み”。

夏休み、冬休み、春休み。

ゴールデンウイーク、祝日、連休、土日。

台風で休校。学校創立記念日。

休みなんて、大嫌い。

友達もいない人にとっての休日は、ただただ孤独なだけ。

前の“私”には友達がいなかった。  
だから、休日は家にいるしかない。家以外に、居場所なんてないから。

家には、家族が1人だけいる。

“依存”という名の家族。

互いに互いを依存し、穴から抜け出せない。

もはや、家族とは呼べない関係……。

そこに救いも、墮落も無い。

あるのは……歪んだ愛だけ。

「……暑い」

夏希が住むアパート。

夏希の部屋の窓の外から、サンサンと太陽の光が照りつけている。

部屋の温度、30°。

「…………つをやう……」

夏希はベッドで寝ていたが、耐えきれなくなつてベッドから出た。

今は7月。

そろそろ夏が本番になつてきていた。

そして、今日は日曜日。

今日何も用事がない夏希は、昼まで寝ようとしていたが、あまりの暑さに朝の10時で断念した。

「うあ…………汗でベトベト……」

夏希の部屋は、風通しは悪くないのだが、太陽の光がまともに入つてくるので、熱がこもりやすい。

「シャワー浴びたい……」

夏希はタンスから、バスタオルと着替えを取り出した。

「お風呂場に行こ……」

アパートの地下には、広いお風呂場がある。

実はこのアパート、地下のお風呂場を“銭湯”として、一般人にも開放してある。

ちなみに、アパートの住人は、無料で使うことができる。

夏希は、急ぎ足で部屋からでた。

そして、部屋の鍵を閉め、急いでアパートの地下へと歩む。

早く汗を流して、スッキリしたいのだ。

アパートのど真ん中に、地下への入り口がある。

両開きの引き戸があり、今は“湯”的文字が書かれた暖簾がかけられていた。

朝の8時～11時、夕方の17時～21時まで一般開放している。

アパートの住人は、大家さんが起きていたら、許可さえ貰えればいつでも使うことが出来る。

「あ、夏兄い！」

引き戸を開けようとした、その時だった。

後ろから幼い声がした。

夏希が振り替えると同時に、夏希の胸の中に……桜が飛び込んでき  
た。

「ち、桜ちゃん……！？」

「ひひゅう……おはよつ夏兄い。今日も暑こね～」

と言ひながら、ギュウッと夏希を抱き締めている。夏希の胸に頬擦り  
していて幸せそうな顔だ。

「ええつーつ、暑いなら離れなよー！」

「暑いけど、夏兄いは別腹なのだー！」

「意味わかんないよ！ ほら、ボク今、汗臭いから、離れたほうが  
いいよ！」

夏希は優しく桜を離れさせようとしたが……桜は更に力を強くさせ  
た。

「ひ、ヒリ、桜ちゃん」

「臭い……夏兄いの汗……」

「えつ？ 何か言つた？」

「ううん……何でもない」

少し顔が赤い桜。

夏希の言つ通り離れたが、今度は夏希の腕に抱きついた。

「夏兄い、今からお風呂に入らうとした?」

「うそ、寝汗でベトベトだからね

「だったらねー、桜の家に来なよー。」

桜は夏希の腕をグイグイ引っ張る。

桜の家は、翠月荘の目の前に建つてゐる一軒家。大家さん一家は、この家に住んでゐる。

ちなみに、桜の家庭は、大家さんである桜の母、娘の桜、桜の祖母が住んでゐる。

桜の父親は、桜が産まれてすぐ亡くなつてゐる。

「桜ちゃんの家に……？」

「だつて今ね、近所のおじこちゃん達で、いっぱいなんだつて、おばあちゃんが言つてたの。ゆつくり入れないよ?」

「えつ…… そうなの?」

少しがつかりする夏希。

今の時間帯は、人が少ないと思つて來たのに……。

「だからー、夏兄いだけ特別。桜のお家のお風呂使つていいんだよー

「本当に? でも…… 大家さん怒らない?」

「大丈夫ー。お母さんもきっと喜んで、夏兄に貸してくれるよー。」

「うん、じゃあ……お言葉に甘えちゃおつかな」

「やつたーつ！えへへ。夏兄い、お風呂から上がつたら、遊ぼうねー。」

「うんー。」

「あーりー、夏希さんなー」

「おはよーございます。大家さん」

桜の家に入ると、桜の母親であり、翠月荘の大家さんまじの、花葉はなばも紅も葉はが出迎えてくれた。

背が高く、ホワホワした雰囲気のある女性。

三十代後半で、一児の母……とは思えない容姿である。十代と言われても、信じてしまつほどである。むしり、十代にしか思えない。

「あらー、大家さんだなんてー、他人行儀ですの。紅葉って呼んでくださいって言つてるのー」

「う……でも、ボクより年上ですか……」

「年上とか関係ないの。それに私は、夏希さんと仲良くなりたいの。だから、名前で呼びあつたほうが、早く仲良くなれると悪いの」

一

「は……はい……」

目の前にいるのは年上なのだが……まるで子供と相手しているみたいに、不思議な感じがした。

「お母さん……そんなことより、夏兄に早くお風呂を使わしてあげてよー。」

「あ、ありがとうございます。夏希さん、いかがなさい。」

紅葉は夏希の前を歩き、お風呂場へと案内した。

「すみません、ありがとうございます」

夏希は紅葉の後ろを着いていった。

その後ろで、桜が別の部屋に入り、タンスを漁っていたことは、夏希は知るよしもなかつた。

「ではではー、『じゅりべつしてここの一』

「あ、はー。ありがと『わざわざ』

脱衣場。

紅葉は、脱衣場に夏希を案内し、脱衣場の扉を閉めて出ていった。

「ふう……さて、汗流そーっと」

夏希が、汗で汚れたTシャツを脱いで、上半身裸になつたときだつた。

「……何してるので?」

「……！」

閉められたはずの扉が、数センチ開いていた。そして、その数センチから感じる視線。

桜が、覗いていたのだ。

「ち、違うんだよ!」

見つかつたとたんに、桜は扉を勢いよく開け放つた。

「え、じゅりー 桜ちゃん!」

夏希は思わず、服で上半身を隠してしまつた。  
相変わらず、女の子のよつた反応をしてしまつようだ。

脱衣場に入つてきた桜。

片手には、下着や「ジヤージ」や「着替え」を持っていた。

「別に夏兄いの裸が見たくて覗いてたんじゃないんだよ！ 夏兄いとお風呂に一緒に入りたくて、タイミングを図つてただけなんだよ！ 裸を見たいからじゃないんだよ！ 裸を！」

「……桜ちゃん？」

「はっ……！ 夏兄いのバカ！」

「何で！？」

桜の顔は恥ずかしさで真っ赤だった。思春期の女の子は、難しいのである。

「とにかく……夏兄い、一緒に入りつつ！」

「……ダメ」

「ええっ！？ 何で！？ ピチピチの女子中学生とお風呂に入れるんだよ！？ 男の夢じゃなーの！？」

「だつ……ダメっ！ 何で！？ とを言つてるので！？ 桜ちゃんは中学生でしょ！？ 中学生の女の子は、自分より歳上の家族以外の男性とお風呂に入っちゃダメなの！」

「やだ！ 何その決まり、意味わかんない。つていうか、お母さんから許可貰つてるもん！」

「えつ！？」

“仲良く入ってきたなさいなー” つて言つてくれたもんー。」

「大家さん……」

大切な娘を任せたほど、夏希は紅葉に信頼されている証拠である。

「大家さんが、良いつて言つても、ボクがダメなー。」

「ふーん……」

桜が突然、何やら悪いことを考えたよいつな目をした。  
夏希は、何故か美魅を思い出した。

「な……何？」

「うー、桜の家のお風呂なんだよ？ 夏兄いには、拒否権無いんじ  
やないのかな？」

ニヤリと、悪そうな顔をして、夏希の田の前に立つた。  
勝つた、そう思つた桜。しかし、夏希はその上をこく男だと、桜は  
知らなかつた。

「……じゃあ、お風呂上がつてから、桜ちゃんと遊んであげない

「つみやあー？」

プルプルと、震える桜。

「権利を振り回して、ボクとお風呂に入るつて言つなり……ボクに

も考えがあるんだよ？」

今度は夏希がニヤリと笑った。

「ず、ずるい！ 夏兄いのバカ！」

「ふふん、高校を舐めちゃダメだよ～」

夏希は桜の頭を撫でて、桜の背中を押して、脱衣場から追い出した。

「ボクが出たら、お風呂に入つていいからね」

「……本当に？」

「うん。約束」

「分かつた……」

桜は脱衣場から出て行つた。  
そして、扉を閉める。

「“約束”だよ……」

桜は、笑つていた。

「ふふわあ……」

花葉家のお風呂は、大人の男性が3・4人余裕で入れる広さだった。綺麗で、いい匂いがした。

夏希はシャワーで汗を流し、頭や身体を洗い終えていた。

洗い終え、すつきりした夏希。

無意識に笑顔になっていた。

「んー……」

夏希は鏡に映る自分が、ふと視界に入った。

夏希が気になつてゐるのは、夏希の特徴である、黒く綺麗で長い髪。そろそろ長さが、腰まで届いてしまう。

「……伸びてきたなあ。夏だし、バツサリ切つちやおかなか……」

夏希の白い肌に、黒く綺麗で長い髪。夏希にとても似合つてゐる。

「でも……前に竜也さんが、この髪を綺麗だつて言つてくれたっけ……」

学校に居るとき、夏希は暇さえあれば、ほとんど竜也に会つて行つてゐる。

竜也は最初、戸惑つてはいたが、今では可愛い後輩が自分を慕つてゐる。

くれるので、受け入れている。

ちなみに、美魅や嵐も、夏希にくつついて着いていっている。  
これも、竜也は喜んで受け入れている。

「……竜也さん」

最近、夏希は自分が変だと思っていた。竜也のことを想うだけで、胸がギュッと締め付けられるのだ。痛いのだが、何故か嬉しさも感じれる。

「……明日、竜也さんに聞いてみよっかなあ……」

夏希は、鈍感なのだ。

「つよし、スッキリしたし、出よつひとつ

夏希は立ち上がり、お風呂場の扉を開けた……。

「夏兄い！」

「にゅわあああーー？」

扉を開け、お風呂場から一步出た瞬間、待ち構えていたか如く、夏希の胸に桜が飛び込んできた。  
桜は……

「桜ちゃんーー？ な、何で裸なのーー？」

一糸纏わぬ姿だった。

「桜もお風呂に入るーー！ 夏兄い、背中流してーー。」

さすがに中学生の女の子と、裸で抱き合ひのせ、世間体としてアウトである。

しかし、桜は離れようとしている、更に抱き締めてくる。

「だ、ダメって言つたでしょー！」

「えーーっ……だって、夏兄いが“お風呂から出たら、お風呂に入つていい”って言つてたよね？ 今さつさ“出た”でしょ？」

「ヤリと、笑つた桜。

たしかに夏希は、一步だが外に出た。

夏希が一步外に出たら、桜はお風呂に入れる。

「約束だよ？ 約束は守つてくれるよね？」

「一緒に入るとは言つてないい……

結局、2人仲良くお風呂に入つたとぞ……。

2人仲良くお風呂に入つてゐる時に、夏希の携帯が着信でブルブル震えていたことに、今の夏希には知るよしもなかつた。

## 14、地獄の電話

「着信……29件」

夏希は風呂上がりに携帯を開き、唖然としていた。

「メール……158件……」

さらに唖然とした。

そして、背筋に悪寒がはしつた。

夏希は今、花葉家のリビングにいた。お昼ご飯を『駆走してもらえ  
るよ』のだ。

大きなフカフカのソファーに座っている夏希の膝の上には、桜が満  
足した表情をしながら、夏希の膝を枕にして猫みたいに寝転がつて  
いた。

「ブーツ、夏兄い、わざわざから携帯いじってばっかり!」

「あ、ゴメン……ちょっと気になつただけだから……」

夏希は着信とメールの主を確かめずに、携帯をポケットに入れた。

「いいなあ……携帯」

「そう?」

「桜も欲しいなあ」

桜はまだ携帯を持つことを、許されてなかつた。

「おかーちゃん！」

桜は起き上がり、台所にいる紅葉に叫んだ。

「何なのー？」

ダイニングキッチンなので、紅葉の姿がよく見える。

「桜も携帯が欲しい！」

「ダメなのー。まだ桜は中学生、携帯を持つのはまだ早いのー」

「でも、友達は皆持つてるんだよー！？」

「他所は他所、家は家なのー」

「何それー？ 古いよー。携帯があれば、夏兄いと離れてても話せるのー……」

「……離れてても……なの？」

ピカッと、紅葉の目が光つたように思えた。

「分かりましたの。桜に携帯を買つてあげますの

「ホントー？ やつたあー！」

桜は両手を挙げて喜んだ。

「そんなに簡単に許していいんですか……？」

夏希は台所にいる紅葉に訪ねる。

「娘を影から応援するのは、親の役目なの」

「は……は……？」

夏希は意味が分からず、しかし、紅葉が桜の事を大切に想っているのは、分かった。

「携帯買つてもらつたら、夏兄いの連絡先を最初に登録するんだー

再び夏希の膝の上で甘えだした桜。夏希は優しく微笑み、桜の頭を撫でる。

「うん。桜ちゃんが買つて、楽しみに待つてるからね」

「えへへ……待つてね」

夏希の手をとり、優しく握つた。

桜は幸せそうに微笑み、目を閉じた。

「待つ？ いいえ、待たせないの」

ドンッと、テーブルに、お昼ご飯の乗つたぼんを置いた。今日のお昼ご飯は、サンドイッチだった。

「今日、買い物に行くの」

畠山としている夏希と桜を見下ろし、田を光らせて言つた。

「も……もしもし……はい……」めんなさい……

夏希は今、自分の部屋にいた。

今は昼の1時30分過ぎ。

桜と紅葉は、携帯を買い物に行く予定が急遽出来たので、お昼ご飯が終わつてからすぐに、携帯ショッピングへと出掛けた。

夏希も一緒に行こうと言われたが、さすがに遠慮した。

行く場所も無くなつたので、家に戻ってきた。

そして……何故かベッドの上で正座をしながら、電話をしていた。

鬼のように電話やメールをしてきた犯人に、先程ようやく連絡を返した夏希。

犯人は、羨魅だった。

『私が電話したのに、出ないってどうこうとかしらーー?』

「『い』めんなさい……『氣づきませんでした』……」

『『い』めんなさい……？ それだけで済むと思つていてるのかしら……？』

「お……思いたいです」

『バカッ！ 私がどれだけ心配したと思つてんのよ……夏希のバカ……』

「つつ……ー？」

突然美魅の言葉が震えた。

まるで、泣きかけているような声だった。

夏希は、そんな美魅の様子に少し困惑していた。

『責任……』

「くつ？」

『私をこんなに心配させた責任……ひとつよ』

「責任つて……どんな？」

『……デート』

「えつ……」

『今すぐ私とデートしなさい……』

電話の向こうの美魅は、どんな顔をしているのか分からぬ夏希だが、何故か美魅の不安そうな顔が思い浮かんだ。

「……いいですよ」

『えつ！？ い、いいの……？ 嫌じやない……？』

夏希の心の中で思つたとおり、美魅が弱くなつてしまつた。

「美魅ちゃんが、喜んでくれるなら、ボクは嬉しいですよ」

『つつ……な、何よそれ！ 夏希のクセに生意氣！』

「えへへ」

夏希は、美魅が恥ずかしがつてゐる声を聞いて、何故か一ヤ一ヤしてしまつた。

『つつ……悔しい……。夏希が私よりも優位になるなんて……屈辱』

ブツブツと言つた後、美魅は急に笑い出した。

『クスッ……アハハッ……そうよ、そうだわ……私が夏希の弱味を握つたらしいのよ……なんだ……簡単じゃない』

「み、美魅ちゃん……？」

久しぶりに、夏希は美魅に恐怖を覚える。首筋に鳥肌が立つ。

そして、美魅は勝ち誇つたような声で言つた。

『今から夏希の家に行く』

えつ！？  
ボクの家に……？

『行く』たら行くの!! 夏希の家で元気出すの!!』

わ  
分かりました  
別にいいですけど

湯まりね  
しゃあ  
今ぐ馬まで迎えに来なさい

卷之三

家口歷 千明力力學 全縣有在 今一卷

- 1 -

美魅を家に呼んで、一緒に遊ぼう、一緒にいてあげようと、夏希は決心した。

美魅は、布団の上に座り、部屋をキョロキョロ見て いる。

「この狭さが、ちょうどいいんですよ」

「思つたより、狭いのね」

夏希は台所において、冷蔵庫から冷たい麦茶を取り出していた。

「ねー…… 夏希」

「何ですか？」

美魅は夏希の枕を抱き締めながら、麦茶の入ったペットボトルを机に置いた夏希を見つめている。

夏希はコップやお菓子を並べながら、様子がおかしい美魅を見てキヨーンとしていた。

「夏希の部屋に…… や」

「はい？」

「H口本つて無いの？」

「……つぶつー、あ、あるわけないですよ！ 何を言つてるんですかー？」

夏希は美魅の前に立ち、顔を真つ赤にさせて、否定した。

「えーっ…… つまんなーい」

美魅は、ブーブーっと口を尖らせて布団に寝転んだ。

「夏希の“おかず”が何なのか知りたかったのになあ」

「おかず？」

また夏希はキヨトンした。

「ん？ あ、そうか…… 夏希はチエリーボーイ、お子さまだもんね  
…………」

「何を言つてゐんですか？ 何かバカにされた気がするんですが……」

「クスッ…… バカになんかしてないよ。ただ、これ以上変な虫がつかないよつに、マーキングしておかないと…………」

「くつ…………？ 美魅ちゃん…………」

美魅は、夏希の腕を引っ張り、布団へと誘つた。

「ふぐつ…………」

夏希は一瞬、何が起つたのか理解できなかつたが、すぐに理解した。

また夏希は、告白された時のよつに、美魅に押し倒されていたのだ。

「いい眺め…………」

「み、美魅ちゃん…………？」

夏希のお腹の下あたりに、馬乗りになつてゐる美魅。少し息があらい。

「まったくバカね、夏希は……。家で私と遊ぶつてことは、“大人の遊び”つてことよ？」

艶かしく笑う美魅。

その笑顔を見て固まる夏希。

「今日は逃がさない……。変な女より、私のほうがいいに決まってる。男は男にしか分からない」

美魅は、グググと夏希の顔へと近づく。口づけをする気だ。

「ま、待って美魅ちゃん！ 意味が分かんないですー！」

夏希は、わたわたと手を振り、混乱している。

「意味？ 意味なんて簡単に決まってるじゃない……私は貴方を愛している……ただそれだけよ……」

「う……」

美魅の目をまともに見てしまった夏希。その目からは、美魅の想いが一つ残らず流れ込んできた。

“愛している”

このよつなうことになってしまった理由はそれだけで十分である。

「黙秘は、肯定とみなすからね？ ……クスツ、怯えりやつて……可愛い」

「う」「う」と、嬉しそうに笑う美魅。そして……そのまま夏希の唇を奪つた。

セリの鳴き声も聞こえず、扇風機の音が心地よく響く蒸し暑い部屋

で……夏希と美魅の、お互いの唾液が舌を使って混ざりあつ音が響いていた。

卷之三

しかし、その行為は、美魅からの一方通行である。嬉しさも一方通行。

楽しさも一方通行。  
気持ちはさも一方通行。

愛毛……一方通行。

「はい……あいこねば」

美魅は、ゆっくり夏希を味わい、扇を離した。  
そして、顔を近づけたまま言つた。

「この前言つてたよね？ いきなりキスしたら、今度は本氣で怒るんだつたよね？ ね、怒らないの？」

クスクスと笑い、虚ろな目をした夏希をからかう。  
しかし夏希は、頭の中がグチャグチャで、息が切れたような声しか  
出ない。

「夏希って、本当に可愛いい……」

「食べたい……」しかし、食べたいがひとつ

ペロッと、自分の唇を舐める美魅。目<sup>ま</sup>が本<sup>ほん</sup>気<sup>き</sup>である。  
……男の目だ。

声にならない声で叫び、美魅を拒否するが……無駄だ。止まらない。

「夏希、愛してる……」

卷之三

美魅が、夏希のTシャツを脱がそうとしたときだつた  
ピリリリ　つと、携帯の着信音が、鳴つた。

「ちつ……いいところだつたのに……誰よ」

着信音は、美魅の携帯電話からだつた。

「えつ……」

美魅は、携帯電話のディスプレイを見て、固まつた。  
着信音の正体は、電話。  
電話の相手は……“ミサト”。

「なん……で」

美魅は震える手で、通話のボタンを押した。

「……………？」  
「……………アキラ？」  
「……………アキラ？」

美魅の声も身体も震えていた。

ミサトからの電話が、まるでこの世の地獄かのよつた。

「…………」「めんなさい……そんなつもりじゃないから。……ちがつ……違つて……！ そんなわけないでしょ！ “約束”なら覚えてるから……ちやんと覚えてる」

夏希は、いつもと様子が一気に変わった美魅を、心配そうに見つめている。

「うん……分かった。今すぐ帰るから……そんなに怒らないで……。だから違うって！ 私は今……“1人”だから……」「…………

美魅は、静かに夏希から離れて、布団からも離れた。

「……私は、ミサトだけの“モノ”だから……」

やつ離つて、美魅は電話を切つた。

「美魅ちやん？」

夏希は先ほどまでの気持ちばかりへやら、心配そうな顔で美魅に近寄る。

「……急用ができちやつた。もつ帰るね……バイバイ」

「えつ……」

「フフフ、何で不満そうな顔してんのよ？ そんなに私とエッチしたかったの？」

「なつ！？ ち、違います！」

「フフフ……そりやね、夏希は違うもんね……」

美魅は、一瞬暗い顔をして、また笑顔に戻った。それは、どこか悲しい表情を思わせる笑顔だった。

「ありがとう夏希。だーいすきー！」

「あつ……！」

美魅は逃げるように、夏希の部屋から出ていった。夏希は出ていく美魅を追いかけようとしたが、体が動かず、ただボーッと見ているだけしかできなかつた。

「美魅ちゃん……」

何故か、胸の奥がズキッと痛んだ夏希。それは、竜也を想つときと同じ痛みだつた。

しかし、今の夏希には、この痛みの正体が何なのか分からなかつた。理解出来なかつた。

モヤモヤした気持ちだけが、胸の中を躊躇する。

## 15、遠回りな告白

「えつ？ 美魅ちゃん、学校に来てないんですか……？」

「つむ、そつなんだ。何でも、風邪をひいたそつだ」

朝、場所は学校。一時間目が終わってからの10分休憩。夏希と螢が教室で話していた。

いつも夏希の隣の席に座っている美魅。しかし朝から、隣の席にいるはずの美魅がいないのだ。

そして先ほど、学級委員長である螢が、担任の教師に美魅の事を聞いてきたのである。

「美魅ちゃんが……風邪」

「つむ、どうりでメールも電話も返事がないわけだ」

夏希と螢が、一時間目が始まる前に、メールや電話をしたが、返事がいっさいに無かった。

しかし、風邪ならば、返事が無い理由が納得する。

「昨日……あんなに元気だったのに……」

ボソッと、夏希は呟く。

しかし、その言葉は螢の耳にしつかりと届いていた。

「む、昨日美魅と会ったのか？」

「えつ……あ……いや」

「何故隠す？ 別に隠すような事ではないだろ？」

隠すような事である。

まさか、美魅に襲われていたなど、言えるはずもない。

「……昨日何かあつたな？」

「ひひ……」

虫は勘がいい。

虫にはシックスセンスが、異様に発達しているのかもしれない。

「やつ言えば昨日、夏希の部屋が少しうるさかつたようだが……美魅が部屋に来たのか？」

「ひひ……？」

“沈黙は肯定”。美魅から言われた言葉を、夏希は思い出す。

「……お前の想い人は、竜也先輩だろうが……バカ者」

はあ……と、ため息をつく虫。

それを、キヨトンと見ている夏希。

「……あつ」

すると、夏希の携帯電話が、ブルブルと震えた。メールである。

「美魅からか？」

「んつ……「ひつん。違いました」

「……“桜ちゃん”？」

蛍は、チラッと覗きこむと、そこには見知らぬ名前が表示されており、首を傾げた。

「知りませんか？ 大家さんの娘さんですよ？」

「あ、ああ！ あの子か……そう言えれば、いたな。接点が無くて、話したことがないな。夏希は仲がよいのか？」

「はい！ 妹みたいで、可愛い子ですよー！」

「うむ……それはいいのだが……」

蛍は、メールの内容を見て、少し苦笑いになっていた。

『夏兄い～！ (、 、 )

えへへつ！

何でもないよー (\* 、 、 \*)

呼んでみただけ！

また一緒にお風呂に入りたいです！

ねえねえ

今日の夜も電話していい？

返事待ってるからね！』

まるで、恋人に送るかのような内容に、さすがの螢も引いてしまつていた。

「夏希……その……頑張るのだぞ？」

「えつ？ あ、はい？ 頑張ります」

夏希が桜にメールの返事をしたと同時に、チャイムが鳴つた。

「カハハッ、あのツンデレ男の娘が風邪つて！ カハハッ！ そらおもろいやんけ」

昼休み。中庭の芝生グラウンドにて、夏希と竜也が、昼ごはんを食べていた。

夏希と竜也は、2人分座れるベンチに寄り添つように座つていた。

学校の竜也は、美魅のよつに、性別を偽ることもせずに、ありのままの姿でいた。

金髪に制服。おまけに綺麗な姿。

しかし、竜也にはあまり、親しい友人がいない。それは何故か、簡単なことで複雑だった。

“近寄りがたい人間”だからだつた。

金髪に、水色の瞳。

少し目付きが悪い目。

男のような性格、口調。

端から見れば、不良と思われている。

だから、竜也の外見ばかり見ている者は近寄らず、竜也の中身を見ている者は親しくなれた。

「おもしろいって……ボクは心配なんですよ……。いつも元気な美魅ちゃんが、急に休みだなんて……」

夏希は、自分で作ったお弁当を食べていたが、箸が進んでいない。ため息ばかりだ。

「そないに心配やつたら、美魅ん家に見舞いに行つたりどつや？顔も見れて一石二鳥やで」

「あ、そうか……その手がありましたね！」

「パアツと、夏希の表情が急に明るくなつた。  
しかし、一つ問題が……。

「でもボク……美魅ちゃんの家、知らないです……」

「アホ、そんなん教員に聞いたら一発やうが。可愛い声で“友達が心配なので、教えてください”ついたら、個人情報なんたらつづけ法律なんか、破つてくれるわ」

ケタケタと笑いながら、菓子パンにかぶりつく竜也。本当に外見と中身のギャップが激しい。

しかし、その荒々しくも優しい性格が、夏希を元気づけてくれるのだ。

「…………あつがとひびきます、竜也さん」

夏希は、嬉しさのあまり、無意識に竜也の肩にもたれかかった。夏希は、ほんのり頬が赤かった。

「夏希ちゃん……？」

「竜也さん……あの、相談があるんですけど……」

「なんやー？ 竜也先輩に何でも相談してええで」

竜也は、夏希の頭を撫でて、ニヤニヤと笑っていた。可愛い後輩からの相談は、先輩として嬉しいものである。

「あの……胸が痛いんです……」

「へ？」

「変なんです……竜也さんのことを想つだけで、胸がギュッと締め付けられるような……痛いんですけど……心地いいっていうか……。これって、何なんでしょうか……」

ジッヒ、少し虚ろな……泣きそつな目で竜也を見つめる。

「……ぶつー？ な、夏希ちゃん……！？」

突然の言葉に、竜也は焦る。

まさかこんな、ぶつこんだ相談だとは思わなかつた。

「それは……天然か？ それとも人工か……？」

「……どういう意味でしようか？」

キヨトンとした顔で竜也の目をジッヒと見つめる。その言葉に偽りはなかつた。

「つ……天然かい……！」

ハーッヒと、盛大なため息をつく竜也。鈍感でもなんでもない、どちらかといえば敏感な竜也は、可愛い後輩からの遠回りの告白に緊張してしまつ。

「……それは……あれや」

ちなみに、竜也は告白をされたことは……“一度も無い”。

告白はしたことあるが、全てが撃沈しているのは、秘密であつた。つまり、一度も男性とお付き合いしたことがないのだ。

だから、竜也の心の中は台風並みに荒れていた。混乱と言つてもいい。

人生初の大規模の台風が上陸して、慌てふためつてゐる人である。

「何ですか……？」

「キドキしながら待つて居る夏希。竜也が心の中では慌てて居るなど、知るよしもない。」

「う……」

“それは、好きだと云ふことだよ”と、正解を書かれて居るのは、竜也の中では不正解だった。

何故なら、人生初の異性からの告白で、内心舞い上がりで居る自分が嫌いだからだった。

しかも、可愛い男の子から。

隣で一緒に歩くのに、申し分ない男の子。むしろ羨むしたいくらいだ。

彼氏にすれば、純粋な夏希に、あんなことやこんなことができる。自分好みにすることができる。

竜也は、こんな不純なことを思つてしまつた自分が……嫌になつてしまつていた。

純粋な夏希に、申し訳なく感じてしまつていた……。

「うふ、あれや……。“竜也先輩を尊敬している”ってことやー。」

「“尊敬”……？」

「せや、自分も竜也先輩みたいに、かつてよくなりたいなつつー尊敬の気持ちや！ カハハツ！ 竜也先輩照れちゃうわー！」

今ならまだ……“勘違い”で、終わらせることができる。

夏希には、自分よりももつとふさわしい彼女ができるはずだと、竜也は高ぶる気持ちを静めた。

「せつ……なんですか。なるほど」

夏希は、何故かモヤモヤした気持ちを感じながらも、納得してしまつた。

「せやから、そないに難しく考えでもええで。『氣樂にて』」

「…………はい！」

「力ハハツ！…………はあ…………損な性分やで…………」

竜也は夏希に聞こえないように、ため息をついた。

竜也は解決したような気分だったが、まだ解決していなかった。まだ夏希の心には、竜也に対する恋心が生きているのだ。今はまだ、夏希は気づいていないが……自分で気づく時は、そう遠くはない。

その時竜也は、逃げずに夏希の気持ちを真っ正面から答えるのだとつぶやいた。

「『めんなさい』……分からぬのよ」

「えつ？」

「春木さんの御家族から、そういう情報は、安易に流さないでくれつて言われて……担任である私でも、春木さんの住所知らないのよ」

夏希は、職員室にいた。

そして、お見舞いに行く為に、美魅の住所を聞きに、竜也と一緒に職員室へとやって来た。

しかし、問題が起きてしまった。

担任の先生でさえ、美魅の住所を知らないのだ。

形として知っているのは、校長や教頭などの上の人間。美魅の家族から、個人情報等は「べー一部の人間だけしか知らないように、命令していたのだ。

「たかが生徒の保護者が、そんな事できんのか……？」

「やうなのよ……私も疑問に思つてたのよ……。でも、校長がそういうことにしつけて……」

担任の先生が、ショボンをしてしまった。

「そうなんですか……」

夏希もショボンをしてしまい、2人からは、負のオーラしか感じな

い。

「しゃあないなあ……つまり、ウチが校長に殴り込みに行つたらええんやろ?」

「違います! 何がつまりなのかが、分かりません!」

「えーつ……だつて、回つてばいで、めんどこわ。校長に直接聞いてたまうが単純明快や」

「そこまでしなくて大丈夫ですよ! 美魅ひやんなならひとつ、電話をくれますから……」

「なんやそれ。こつくるが分からん電話を、モヤモヤしながら待つじるとか? 夏希ちゃんが心配なのは、今やう」

「やうですけど……」

「せやから、美魅の住所を校長から聞き出して、行つたつたらええんや」

「う、乱暴すぎます……! 竜也さんの気持ちは嬉しいです。でも、それはきっと美魅ちゃんが嫌がります……。だから、美魅ちゃんから来るのを、待っています。心配ですけど、耐えるのも大事なんです」

「……へこへい。夏希ちゃんがええなら、ウチは何も言わん

竜也は優しく微笑み、夏希の頭を優しく撫でた。それに夏希は泣きそうになってしまったが、グッとこらえた。

「まつたく……夏希と美魅は、ホンマに仲ええんやなあ」

「うりやましくなるような仲のよとに、竜也は軽く嫉妬していた。いつか自分も、夏希や美魅や竜と、こんなふつに仲良くなれるものかと、考えていた。

「……“私の”美魅に、何かご用かしら？」

突然、夏希と竜也の後ろから、綺麗な声をした女性の声が聞こえた。

「つ……！」

2人は、ほぼ同時に振り返った。2人の後ろに立っていた人物……。

「あら、驚かしてしまったかしら？『ごめんなさいね、美魅の話題が出てたようだから、気になってしまつたの』

女性は、真っ黒の長い髪。

身長は高い。竜也とほぼ同じ。

スタイルはとつても良い。

着ているスーツがとても似合っている。

綺麗な顔立ちをしていて、どこかのモデルみたいだった。

「あ、いえ……大丈夫です。あの……もしかして、美魅ちゃんの『家族ですか？』

「クスッ、そうよ。私は美魅の“姉”よ」

「お姉さんですか……。あ、ボクの姉前は、雨唄 夏希といいます  
！」

「……ウチは、白木 竜也ッス」

「私は、春木 ミサト……。ようじくね」

## 16、支配欲

「ふ、ふわあああ！？」

突然、担任の先生が目を丸くしながら、ミサトを見て叫んだ。あわあわと、慌てふためいている。

「り、り、り……理事長！」

「おはよう！」やこます、涙子先生」

ミサトは、夏希達の担任の先生……涙子先生に、ニッコリと微笑んだ。

「えつ？ 理事長……？」

夏希はミサトを見て、ポカーンとしていた。驚き過ぎて、リアクションが、できなかつたようだ。

「あら、美魅つたら私の事を話していないのね……クスッ」

ミサトは夏希をじろじろと見て、微笑んだ。

「可愛らしい貴方は、美魅の……お友達かしら？」

「はい！ 美魅ちゃんは、ボクがこの学校に転校してきて、初めて

の友達になつてくれました

「 そつ…… 美魅に、こんな可愛らしきお友達がいたなんて。あの子つたら……」

「 ……？」

ミサトは、微笑んでいたと思えば、急に少し悲しそうな顔をした。

「あ、あ、あの……」

すると、まだ若干慌てている涙子先生が、ミサトを呼んだ。

「理事長が……私に何か」用意でしょつか……？」

「あら、『じめんなさい』。忘れてしまつていたわ」

ミサトは、用事を思い出すと、持つているカバンの中から、茶色の封筒を取り出した。

「これを渡しにきたの。美魅のテスト結果の、保護者確認書。たしか、今日締め切りですよね？」

「あ、わざわざすみません……。風邪なら、締め切りを過ぎてからでも、よかつたのですが……」

「いえいえ、美魅が風邪なら、保護者である私が、持つていくのは当たり前よ。それに、締め切りは守らないと。貴女に申し訳ないわ。大切な弟の、担任なんですから」

「あ、あはは……」

涙子先生は、苦笑いのよつたな笑顔で、笑つた。涙子はミサトが、苦手のよつだ。しかし、その事をミサトは知つてゐる。知つていながりも、ミサトは涙子先生に変わらぬ態度で接してゐる。

すると、涙子先生が……。

「理事長つて……春木さん……、美魅さんの保護者だつたんですね……知りませんでした」

「クスクス、隠すつもりは無かつたのよ。ただ、あまり知られてほしくなかつただけ。理事長の弟だからつて理由で、特別扱いされたくなかつたから」

「そ、そんな」としませんよー。」

「分かつてますよ。今年、貴女を水の都高校の教師として採用したのは、私なんですか。私の見る目で、狂いはありませんよ」

「う……うう」

涙子先生はボツと顔が真つ赤になつた。

「クスクス、涙子先生、それでは失礼しますね。“夏希さん”も、  
さよなら

ミサトは一礼して、振り返らずに職員室から出ていった。

「……ケツ、ウチには挨拶無しかい」

竜也は、ミサトが出ていった方向を睨み付けながら言った。  
そして、竜也は息をフーッと吐いて夏希を見た。

「竜也さん？」

「なるほどな、よー分かったわ。そら、住所や色々な事隠すわけや」

「どうこう事ですか?」

「水の都高校の理事長やぞ? そんな理事長の関係者が、生徒ん中  
おる言つたら、どんな田で見られると思つ?」

「それは……」

どんな田であれども、それはきっと普通の田では無い。普通の人  
間を見るような田ではないだら。そして、根も葉もない噂が流れ  
るであらひ。

理事長の弟だから、どんな成績でも卒業できる。

理事長の弟だから……。

理事長の弟だから……。

“理事長の弟だから”と言葉が無限に溢れかえる。

だから、隠す必要があった。  
教師にまでにも全てを……。

「春木さん……いつも1人だったのは、そのせいだったのね」

涙子先生が、悲しそうに微笑んでいる。

涙子先生が水の都高校に採用され、4月に、2年3組の担任を任せられた時、美魅がクラスで浮いているのが最初に気づいたことだつた。何回も話を聞こうとしたが、全て簡単にあしらわれてしまつていた。

それは、美魅が自ら人を避けていたのだ。仲良くなれば、いつか自分が理事長の弟だとバレてしまうから……バレてしまつた後の、人間の変わつてしまつ姿が……怖かつたから。

「あれ？ でも……美魅ちゃんが、理事長の弟だつて事を知つている人がいましたよ？」

夏希はふと、転校してきたばかりの時を思い出した。

「たしか……転校してきた初日に、美魅ちゃんにパシられたことがあつたんです。そのパシられている時に、別のクラスの男子に、噂を聞いたんです……」

“美魅に逆らつたり、機嫌を損ねるようなことをしたら、学校から消される。“家庭の事情のため転校”つて事になつて。美魅を溺愛している“美魅の姉”が、この学校を牛耳つてる奴だから。美魅が気に入らない事があつたら、姉は必ず動く。”

「つて……あれば、どういう事なんでしょうか……」

夏希の疑問に竜也は、突然しかめつ面になっていた。

「竜也さん?」

竜也の様子がおかしくなっていることに、夏希は見落とさなかつた。

「いや、何でもない。多分それは、ごく一部の生徒が美魅を知つていて。面白半分で噂を流したんや。愉快犯つてやつや。気にせんとさ」

「は……はい」

竜也はしかめつ面から、微笑みに変わつた。しかし、目が笑つてはなかつた。何かを……隠しているような目だつた。

そんな様々な疑問をもみ消すように、昼休憩の終わりの予鈴が鳴り響いた……。

「ケホツ……ケホツ……」

美魅の咳が響く部屋。

ぬいぐるみが沢山ある、女の子のよつたな部屋。  
ベッドの上で、美魅は眠っていた。

「あ、――最悪」

そして、不機嫌だった。

「何で今田にかぎって風邪ひくのよ……ありえない……」

今日は、美魅にとって特別な日だった。何故、特別な日かといふと  
……。

「今日は、夏希に告白して、ちょうど一ヶ月目なのに……」

美魅が、学校の教室で夏希に告白してから、1ヶ月経つたのである。  
美魅は、今日もう一回真剣に告白をしようとしていたのだ。

しかし……風邪をひいてしまった。

「う、――最悪……」

美魅は布団の中で悶えていた。  
すると……。

「美魅、入るわよ」

「えつ――？」

ガチャッと、突然美魅の部屋が開いた。

「美魅、いい子に寝てた？」

ミサトが、微笑みながら入ってきた。手には、スーパーの袋。中身は様々な果物が入っていた。

「ミサト！？」 し、仕事はどうしたの！？

「何を言つてるのよ。大切な美魅を1人にして、仕事なんか出来るわけないでしょ」

「だからって……休んだの！？」

「当たり前じゃないの」

「つ……」

美魅は、更にぐつたりとしてしまった。呆れているのだ。

「それより、リンゴとか色々果物買つてきたのよ！ 美魅、果物好きでしょ？」

「ヨニコと笑いながら、美魅の側に近寄る。そして、美魅の足元の近くに座つた。

「今は……いらない」

「あらあら、食欲が無いのは仕方ないわね……残念」

ミサトは、机の上に果物の入ったスーパーの袋を置いた。

「あ、そつそつ。今日、書類を学校に届けに行つたら…… 美魅の“お友達”に会つたわ」

「えつー?」

美魅は、ミサトの口から出るはずのない言葉が聞こえ、無意識のうちに、ミサトを見ていた。  
そして……嫌な汗が頬を伝つた。

「たしか……“夏希”って言つてたわね……あの子」

「ゴー」と笑いながら、ミサトは美魅の目を見つめる。美魅の視線を反らさせないように、ジッと見つめる。

「し……“知らない”……そんな人」

「あら? でも、たしかに友達つて言つてたわよ? 転校してきて、初めての友達だ。つて……」

「その子の妄想じゃないの。もしかして、私のファンじゃないの?」

嫌な汗をかきながら、美魅はひきつきながらも、嫌味な笑みを浮かべていた。

「ふーん……じゃあ“危ない”わね」

「えつ……?」

ミサトから笑顔が消えた。

「美魅を友達だと妄言する危ない輩は、ストーカーになる可能性があるわ。早急に“処分”しないと……」

「ちょ……ちょっと待つてよ。処分とか……やり過ぎじゃない？ 放つておいても大丈夫だつ」

「大丈夫なわけないでしょ！」

ビリビリと、ミサトの大声が部屋に響いた。響いただけでなく、大声で美魅が完全に黙つてしまつた。

「あんなストーカー野郎に、私の大切な美魅を汚される可能性があるのよ！？ そんな奴が、美魅のクラスに……私の学校に居ること事態がありえないわ！ あんな奴、早急に退学よ！ そうね、今日中に退学させないと……一分一秒とて、あの学校に居させるわけにはいかないわ！」

ミサトは携帯を取り出し、何処かへ電話をかけようとした。  
しかし……

「やめてええええ！…」

美魅が、勢いよくミサトの腰にすがり付き、携帯を床に叩き落とした。

「何をするのよ！？」

「止めて！ 違うの！ 夏希は……夏希は私の大切な友達なの！」

「はあ！？ わつき、違つて言つてたでしょ……」

「あれは嘘なの……『めんなさい』……夏希を退学にしないで……“消さないで”……」「

泣きながらミサトに懇願する美魅。その姿は……今までの美魅からでは考えられない、異常な姿に見えてしまつ。

「もう……」これ以上……私の大切な人を消さないで……

「クスッ……馬鹿ね」

そつと、ミサトは優しく美魅の頭を撫でる。その手には、愛が込められていた。

「消すわけないでしょ。だつてあの子、“男の子”じゃない」

「つ……」

「男の子の友達なら、大歓迎。私が消すのは……美魅に近寄る“糞ビツチ共”よ。美魅には、私がいる。お姉ちゃんだけが愛してるの。お姉ちゃんだけが愛していいの。他の女共に、美魅を愛する権利なんかあるわけないじゃない」

ミサトは、美魅を優しく起こして……再び仰向けに寝かした。そして……美魅に覆い被さつた。ミサトは、美魅を押し倒したよくな形になつた。

「美魅は、私だけのモノ。私も、美魅だけのモノ。愛しているわ……美魅」

「つ……やめつ……」

ミサトは、美魅の唇を奪つた。

ねつとりと、ゆつくりと、美魅の口を蹂躪するミサト。

苦しさと、恍惚で美魅は布団を握り締めて、ミサトからの攻めに耐え続けていた。

これで何度もか分からぬ無理矢理のキス。最初は、何故こんなことをするのか理解できなかつた美魅。

しかし、夏希が現れてから理解した。

愛するものを支配する“支配欲”だつた。お前は自分のモノだと相手に植え付ける行為。

「美魅……美魅……」

ミサトは、完全に興奮していた。もう止まらない。さかりのついた

犬のように……止まらない。

目も血走つていた。

「美魅つ！」

ミサトは、美魅の寝巻きを乱暴に脱がし、下着も脱がし、裸にする。美魅の綺麗な素肌が、全て露になる。

「//……サト……」

美魅は、もう抵抗しなかつた。

何もかもを諦めた目で、姉とは思えない姉を涙目で見つめる。

それは、最後の抵抗と言つても、間違いではなかつた。

しかし、それは無意味だった。

今のミサトには……何を言つても無駄だった。

美魅は、耐えるしかなかつた。

歪んだ愛を、受け入れるしかなかつた。

歪んだ愛に、愛は存在しない。

歪んだ愛は、支配欲に変わる。

変わることには、何かしらの理由が必要である。理由が無ければ、変わらない。

愛に理由なんかは必要である。  
理由も無しに人を愛せない。

たとえ、それが家族であろうとも……姉弟であろうとも。

これから語るのは、美魅とミサトの物語。  
夏希と出会つ数年前に、物語はとかのぼる。

ミサトと美魅が、歪んだ物語。

ミサトと私は、本当の姉弟じゃない。

私が小学校に入学した時に、私の母親が病氣で亡くなつた。父親は、私の前では明るく振る舞つていたが……内心では死にたいくらいショックだつたと思う。

まだ愛だの何だの知らなかつた私は、子ども心に、父親のそんな姿に我慢できなかつたのか……女装をするようになつた。

最初は、母親のぶかぶかのスカートを履いたり、化粧をしてみたりと……母親の真似をした。

少しでも、母親みたいになれたらと……そうすれば父親は少しでも元気になつてくれるかもしれないから。

しかし……それは叶わなかつた。

父親や親戚は、私のそんな姿を見て、母親が亡くなつたショックで、母親の影を追うようにしている行為だと言つていた。

父親は少しも元気にならないし、女装をし続ける私に『止める』と言つてきた。

だけど、私は止めなかつた。

買う洋服も、女の子の服。  
髪も伸ばし、遊ぶのも女の子と。

そして気づけば、女の子のように振る舞つてはいるのが、当たり前のようになっていた。

もはや、本来の目的なんて消えていた。忘れていた。そもそも、目的なんて無かつたのかもしれない。

父親も諦め、私を“娘”的に育てはじめた。

世間も、最初は女装する私を蔑みの目で見ていたのに、しだいに順応していくのか、私に……

『可愛いね～、美魅ちゃん』

『お母さんこそっくりだよ』

『女の子よりも可愛いじゃないか。似合つてゐるよー』

などの、軽薄な言葉で私を讃めた。

言葉に重みが無い。

心に届かない。

讃められてるのに、貶されているようにしか聞こえなかつた。  
私に向ける笑顔が、無表情に見えた。

そんな上辺だけの愛に私は感じないし、ときめかない。

周りからしたら、私は無愛想で冷たい人間だと思われたに違いない。  
だけど、そんなの知つたことではない。

周りの人間が悪い。

他人に擦り付けた？

人聞きの悪いこと言わないで。

父親さえ、私はそんな目で見るようになつてきた、中学校一年生の頃だった。

父親が、いつまでも独り身では寂しすぎたのか、再婚することになつた。

相手は、有名な私立高校……水の都高校の理事長。大学生四回生の娘が1人。しかも、次期理事長になるであろうと言われている娘。

どうやつて知り合ったのかなんて知らない。興味も無かつた。だから聞かなかつた。

母親になる人にも興味無かつたし、姉になる人にも興味が無かつた。家族なんて、しょせんただの他人の集まり。クラスメイトと一緒に。“仲良くしましょう”なんて、今どき流行らない。

だから私は……無情になつた。

誰も寄せ付けない。

冷血で、無情な人間。

社会が冷たいんじゃない。

私が社会に冷たくしているだけ。

私は私で生きていく。

そう思つていた。

そう信じていた……。

ミサトに出会うまでは。

「はじめまして。私の名前は、ミサトって言ひの。貴方の名前は？」

「……私の父から聞いているはずですが

「ああ～ん……冷たいなあ美魅ちゃんは～」

再婚し、父親と私の家に住むことになった、新しい母親と姉となつたミサト。

そして、私の部屋。

姉となつたミサトが何故か、私の部屋に上がり込んできました。カーペットの上に正座し、ニコニコと笑つてい。

「お母さんとお父さんが仲良くなつたから、私達も仲良くなつよー。」

「そんな……子供みたいなこと言わないでください。ミサトさんは、大人なんですから」

「ふー……敬語はやめなさい！ あと、ミサト“さん”って呼ばないで！ 家族なんだから、呼び捨てでいいのー。」

「……はあ」

きっと、私がミサトの言ひ方を聞かなければ、部屋から出でこつてくれない。

それなら……聞くしかない。

「分かったわよ……ミサト。ほら、気がすんだなら、早く部屋から出でていってよ……」

「うわあ……仲良くなるための、呼び捨てとタメ口なのに、突き放された感MAX」

だけど、相変わらずミサトは「口」の笑顔。……」の人が、よくわからない。

「美魅ちゃん、そんなに可愛いんだから、もつもつと笑つたら、もつともつと可愛くなるのに~」

「……可愛い?」

ミサトの言葉に、私はピクッと反応してしまつた。“可愛い”……私が、一番聞きたくない言葉。

「うん、可愛いじゃん美魅ちゃん。男の子だなんて、信じられないな~」

「そんなこと……本当に思つてないせこ……」

「えつ?」

「こらんだよねー……私の外見だけ見て、友達になつておいたら自

慢せりネタに出来るからって、適当に面葉選んで私に近寄つてくる奴

「

「美魅ちゃん……」

「貴女も、そんなタイプ？ 仲良くなつた新しい弟が、女装してるので、ネタに出来るから？ 私をネタにして、一時の有名人になりたいって思つてるの？」

私のこの時の顔は、本当に嫌な顔をしていたんだと思う。だけど、ミサトは逆上することも、引くこともなかつた。柔なか表情で、私を見ていた。

「そんなふうに思つてないよ！ まあ、確かに可愛い弟が出来たつて、自慢はするナビ……『へへへ』

「……あつそ」

「あーーー また冷たくした！ なによ“美魅”つたら、少しくらい笑つたらどうなのー！」

「笑う？ 何で可笑しくないのに笑わなきゃいけないのよ」

「ほう……可笑しかつたら笑うのね？」

「えつ？ 何？ ちよつ……ミサト？ 何でそんなに笑つてるの？ 止めて……そんなにジリジリ近寄つてこないで！ なにその手！ ？ ワキワキしてゐ手は何！？ やめつ……やつ……ござわやあああーーー！」

「ほほほつ！ こじか？ こじがええんかあ～？ ね姉さんがマツ  
サージしてあげるわー！ ぬうあつはつはつ！」

「やめひつは脇腹ひダメえつー。」

私は「カーテン」で机へと押し倒され、そのまま……脇腹へのマッサージと重ねた、これが攻撃に襲われた。

「ふつふつん！ 美魅敗れたりい！」

「意味分かんない！」

くすぐられたおかげで、息がとても荒くなり、しゃべり方に支障がでてしまっていた。  
うまく喋れない……。

「うんうん。さつきよりいい顔してるよー。何で言ひか、うー……  
色っぽくなつたよー！」

「嬉しくない！」

「てへへん！」

「ウザー、可愛くないし、イラつてするだけだからー。」

「もー…… 美魅つたら、ツ・ン・デ・レ…… なんだか、うー。」

「……今すぐ部屋から出てこいってやる……」

ミサトの絡みが……今まで出会ったことの無い、絡みだつた。混乱したし、イラつとした。だけど……不思議と嫌じやなかつた。むしろ……心地よかつた。

最初の嫌な気持ちなんて、どつかに吹つ飛んでしまつたような……。そんな清々しい気持ちだつた。

心のどこかでは、最初からミサトを認めていたのかもしない。ミサトは、今まで会つた人とは全く違うということを。

ただ認めたくなつただけな気がする。ミサトの言つ、ツンデレだったのかもしねりない。

産まれて初めて……人を認めた。

ミサトは、私の初めての……認めた人。信頼していいと、思えた人だつた。そして、興味を持てた人でもあつた。

ミサトは、明るくて前向きで、いつも私を元気づけてくれる。

笑うことが少なかつた私。だけど、ミサトには、笑顔で話すことができた。

いつも曇りだつた心に、光が射し込んできたよつな……そんな気分だつた。

「笑顔つていいよー！ 太陽みたいでさー。暖かいよね～」

「ふーん……。私は別にそう思わないけどね」

「えーー！？ 美魅の笑顔は一番輝いてる太陽なのになあ

「つ……な、何恥ずかしいこと言つてんのよ……」

私の笑顔が太陽なら……ミサトの笑顔はひとつなるのよ。太陽以上に、輝いてるじゃない。

「恥ずかしがつてる顔も、輝いてるよ～……」やふふ

「ああー もおー……ミサトって何で意地悪なことしか言わないのー？」

？」

「んー？ だつて美魅が可愛くて、ついイジメたくなるんだもーん。にやははつ」

「……」

ミサトに、『可愛い』って言つてもらえたのが、嬉しかつた。ミサトが私を褒めてくれるのが、とても心地よかつた。

ミサトの言葉に『重み』は無い。だけど『想い』があつた。言葉を聞いてくれる人を想つた言葉で、話してくれる。だから、話していく楽しいし、ミサトの魅力にも惹き付けられてしまう。

ひねくれた私をも、ミサトは惹き付けてしまった。

社会に冷たくしても、ミサトに冷たくすることなんて出来なかつた。ミサトだけは特別。ミサトがいれば、私は変われることができる。ミサトのような人が、まだこの世にいると、信じることができる。

徐々にだけど、私は変わつていつた。

そして……ミサトも変わることになってしまった。

“不幸と幸せは背中合わせ”とは、よく言つたもので……人間は簡単に壊れてしまう生き物。

人間は、<sup>なまもの</sup>生物だ。

生物は、簡単に腐つてしまふ。腐つて、食べられなくなつて、見捨てられていく。

人間と言つ名の<sup>なまもの</sup>生物は、腐るタイミングが人によってバラバラである。

いつ腐るか分からぬ。賞味期限、消費期限が分からぬのだ。  
不幸は腐ること。

ミサトが、腐つてしまつた。

中学一年生の夏休み。

それは、突然だつた。

「み、羨魅……お父さんとお母さんが……」

私は、その日発売の欲しい本があつたから、夕方に本屋に行つた。二時間くらいで、家に帰つてきた。まだ外は明るく、ひぐらしも綺麗に鳴いていた。

玄関を入ってすぐ「」、私の姉であるミサトが、顔を真っ青にして私を出迎えたのは、忘れられない。

「ミサト？」

「お父さんと……お母さんが……トライックに……」

「え？ 何？ 落ち着いてミサト、いつたいどうしたの？」

ミサトはカタカタと震え、今にも発狂しそうなくらい不安な状態だつた。

「交通事故にあって……重傷で……病院に運ばれたって……今さつき電話が……」

「つづー？」

リビングに通じる廊下に、家の親子電話の子機が転がっているのが分かつた。

私はミサトから離れて、子機を拾い、耳をあてた。

『もしもし？ どうしましたか？ 大丈夫ですか？』

まだ電話は繋がっていた。

電話がきたのは、私が帰つてくる少し前なのかもしれない。

「もしもし、すみません」

『あ、ミサトさんですか？ 大丈夫でしたか？』

電話の相手は、女性だった。

落ち着いていて、聞いているこつちは、何故か安心できるような声、たまつた。

「いえ、違います。私はミサトの弟の美魅と申します。ミサトは今、少し混乱しているので……私が」

電話の相手は、病院の人だか警察の人だか、忘れてしまった。だけど、事故のことを詳しく話してくれたので覚えている。

簡単に言つと、私の両親は大型トラックに殺された。

詳しく述べと……乗用車に乗っていた両親。運転していたのは父親。助手席には母親。

お互い再婚して一年目だから、まだ愛は冷めてはいなかつた両親は、2人きりでなにかと車で出かけていた。そんないつも通りが、いつも通りにならなかつた。

大型トラックの運転手は飲酒運転をし、居眠りをしていた。そして、中央線をはみ出してしまい、対向車線に侵入し、両親の車と……正面衝突した。

そして、その他の車も数台巻き込んだ。

両親は病院に運ばれたが、死亡。

大型トラックの運転手は軽傷。

他の巻き込まれた人々も、不幸中の幸いか、軽傷だった。私達の両親だけが……この世から旅立つた。

「美魅…………美魅…………お父さんとお母さんガ…………うあ…………うあ…………うあ…………」

この事件がきっかけで、ミサトは少しずつ狂つていった。腐つていった。  
私が信頼したミサトが、少しずつ狂い、もはや別人になつてしまつ  
ほどに……。

「残念ながら……」両親は、お亡くなりになりました

別に、悲しくはなかった。

あ、そう。……で？

という気分だった。

元々、私は両親の愛情を拒み続けてきた人間だった。

“両親”っていうのは、血が繋がっているだけで、他人は他人。私を産んでくれただけ。育ててくれただけ。

別に感謝してないわけじゃない。

ただ、拒んだだけ。

悲しくもないし、苦しくもない。

“無関心”。

“親しくもない隣の家の誰かが死んだ”くらいのレベル。

薄情ものと言われても、私は違うと言つ。

情なんて、私には存在しないから。薄くも濃くもない。しいていうなら透明。

無情とでも言つのかな。

いや、でも面白いことがあつたら笑うし。好きなもの食べてたら幸せだし。可愛い服見つけたら、欲しくなるし。

ミサトと話してゐる時は笑えてゐるし、幸せ。

無情ではない。

ただ、“愛”には無情なのかもしれない。  
何故かは分からぬ。

“愛”を理解できないのか、理解しようとしたしないのか。  
分からぬ。

でも、1つだけ“愛”について言える。  
どこかで聞いた言葉で、受け売りの言葉だけ。

“愛”は“狂”である。

そして……両親が死んで、沢山の問題が私達を襲つた。

両親を失つた私達を、別に親しくもない、親戚達のいつたい誰が引き取るのか。

ミサトは大学をどうするのか。  
生活費などを、どうするのか。  
住んでいる家はどうなるのか。

そもそも、事故を起こした運転手との問題をどうするのか。

まだまだ問題は沢山あつたが、全て直つなんて気が狂つ。

そんな沢山の問題の中で、一番問題だったのが……ミサトだった。

事故以来、ミサトは笑顔を見せることがなかつた。魂が抜けたように、空っぽなミサトだつた。

心配する私に、ミサトはいつも一言だけ言つて終わる。

「大丈夫。美魅は何もしなくていいから。いつも通り、学校に行つて、いつも通りの生活をしていて……ね」

その言葉通り……私はいつも通り、中学校に通り続けることが出来た。

ただ、両親がいなくて、ミサトが笑わないだけの生活。

それ以外は……不気味なくらい、いつも通りだつた。

その不気味さが……苦しみに変わるのは、そんなに時間が掛からなかつた。

中学校の私がいる教室。

誰にでも冷たく接する私に、友達なんかいるはずもなく、休憩時間はいつも机に座つて窓の外を眺めていた。

自慢じやないけど、私は学校の席が、産まれて一度も窓際以外の席になつたことがない。

「春木君、元気無いのね」

「えつ？ あ……」

いつもどおり、私が窓の外をポーッと眺めていたら……名も知らないクラスメイトが私に話しかけてきた。

女の子で、第一印象が“フワフワした女の子”だった。栗色の、ウェーブがかかった長い髪。小型で可愛らしい顔。つぶらな瞳。笑顔がとても似合つ人だった。

「あ、私の名前？　ぶー……クラスメイトなんだから、知つといてほしかったなあ」

「……ごめんなさい」

「ううん。いいんだよ！　今から覚えてもらつたらいいんだから！　僕の名前は、愛十。あいとよろしくね」

「……うん」

「どこかしら……愛十からミサトと同じ雰囲気を感じた。ミサトと出逢つた時と同じ雰囲気だった。」

「クスクス……」

「何で笑ってるのよ……私何か可笑しい」としたかしら？」

「ううん、『ごめんなさい』。だって春木さん、いつも皆に冷たくしてたから、こんな無防備な春木さんが珍しくてわ」

「……無防備」

「僕は、今の春木さんがいいけどなあー」

「ばか、そんなお世辞を言つても、何にも出ないわよ」

不思議と、私は愛十と絡んでいて嫌じやなかつた。本当に一つの間にか、馴染んでいた。

「えーつ……世辞じゃないのに……春木さんは、優しいほうがいいんだからー」

「ふーん、そう……」

優しい。この私が……人に優しく？ 無理ね。そんなこと、出来るわけないじゃない。

私が変わつたといつても、そこまで変わることは出来ない。白バラをペンキで赤く塗つても、根っこには白バラの根のまま。元は変わらない。

「ねえ、春木さん」

「何かしら？」

「名前で呼んでいい！？」

「……それくらい、好きにしたら？ 私は何て呼ばれようと、気にしないから」

「やつたー！ やつぱり美魅ちゃんつて優しいー！」

「それくらいで優しいって……ふふつ

やつぱり、愛十は少しズレた子なのかもしれない。けど、やつぱり嫌じやない。

「あー、今美魅ちゃん笑つたでしょー!？」

「……わあ

「もつー回ー もつー回笑つてー [写メ撮るからー]

「意味が分からん!」

「そのまんまの意味だよー！ わあ、美魅ちゃん！ 貴方の眩しい笑顔は僕の待受画面になるのだあー！」

「キモいー！」

「ふべえ！？ あーん……僕の携帯とらないでえー！ カーえーしーてーえええー！」

泣き出してしまった愛十。

やり過ぎたとは微塵も思っていない。

端から見たら、私達はどんな風に見えていたんだろう。  
やつぱり……友達に見えたのかな？

友達なんて……中学生に上がつてから、作らなくなつた。  
つていうか、友達を“作る”つて……何様つて感じかな。  
意味的には、あつてんだろうけど……やつぱり“作る”つて“物を作る”のイメージが強いからなあ。

人間は物じやないし、友達が無機質な冷たい意味に感じる。

やつぱり、友達は“親しくなる”だと思つた。

「あり？ 美魅ちゃんどうしたの？ 何か急に静かになつたよー？」

「え？ あ、いや……何でもないわよ……ほひ、携帯返してあげるから、泣かないの」

「えへへへ。やつぱり美魅ちゃん優しい」

「はいはい……ありがと」

この後、愛十から聞いたのだけれど……私が最近元気が無いみたいだと、クラスメイトから心配されていたらしく。

……何を今さら、クラスメイト面しているのだと、私は呆れた。

今まで散々私に冷たくされたくせに、私の心配をしていた？

『どんな人でも、クラスメイトなので僕らの仲間なんだ』って言いたいのか？ 善人になつたつもりか？ 偽善者共が。

どこの王道漫画だよ。王道漫画なら、週刊で連載している漫画雑誌にでもやつてなさいよ。

……つと、今までの私なら思つていた。やつぱりアサヒの前までの私なら。

それこそ、王道漫画な展開なのだけれど……それで構わない。

“嬉しかった”。

たとえ偽善であつても、クラスメイトが私を心配していた……存在を認知していたことに……“嬉しかつた”。不思議な気持ちだつた。胸の奥か喉の奥か、はたまた両方に、ムズムズとした何かが溢れてきた。声にはならない唸り声が出かけて、ひつこんだ。多分……これが“嬉しい”と言つ気持ちなんだと思う。

私は……嬉しかつた。

それが切つ掛けになつたのか、愛十を中心に、何人かのクラスメイトと親しくなつていた。

本当に自然と親しくなつていた。自分でも笑えるくらいに、“友達”的存在が暖かく感じていた。とても大きな存在になつていた。

特に、愛十の存在は……群を抜いていた。声をかけてくれた日から、私の周りに存在し続けた。

その存在は、ミサトと同じくらい大切な存在になつていた。

だけど……愛十とミサトは、磁石のSとNだつた……。2人は……決して交わることがなかつた。

私は中学生になり、暖かくなつてきた5月中旬。

「こんな時間までいつたい何をしていたのー?」

「うう……//サト……?」

“その日”は突然やつてきた。

その日は、土曜日の夜10時過ぎだつた。

18歳未満は、10時以降に外をぶらついてはいけない。学校からも//サトからも言われていたが、その日は愛十の家で晩ごはんを“」ちそつしてもらつていて、あまりにも居心地がよく、ギリギリまで遊んでいた。

「私がどれだけ心配したと思つてゐるのー?」

「え……でも……//サトにメールしたよ?」

“友達の家で遊んできまーす! 晩ごはんは、いらないからー”…  
…と、メールをしていた。

「あれだけの文章で、納得するわけないでしょ! それに……何回も電話したのに、電話も出ないなんて…」

さつきも言つたけど、愛十の家は居心地がよくて、携帯も時計も気にならなかつた。

帰り道も、愛十の家の出来事を思い返しながらだつたから、携帯なんて見なかつた。

「「」、「めんなさい」」

「バカ…… 美魅に何かあつたら…… 私…… 私……！」

ミサトは涙を流し、ボーッと突つ立つてゐる私を抱き締めた……。抱き締める力に、色々な想いが込められていた気がした。

「私には…… もう家族は美魅しかいないの…… 美魅がいなくなつたら…… 私……」

ミサトの涙が私の頬に落ちる。

暖かい涙が、頬を滑り落ちるにつれて、冷たくなつた。まだ涙は止めどなく落ち続ける。

「「」めんなさい」「」めんなさい」

両親が死んで、一番精神的にショックだつたのはミサト。家族想いで、誰よりも家族を大切にしてきたミサト……。両親の死は絶望だつたに違いない。

だから、いつも以上に過剰な心配性になるのは、当たり前の行為。

それを、初めて友達の家で晩御飯を「ごちそうになると舞い上がつてしまい、そんな当たり前のことをすら忘れていた。だから私は……謝ることしかできなかつた。

「美魅…… 約束して…… “私の側からいなくならない” つて

“約束”。

それは、人を縛り続ける行為。

……分かつて いた。

だけど、私はもう一度ミサトに笑つてほしい。“約束”することによって、ミサトが少しでも救われるのなら……。

「うん。約束する。だから、安心して……ね？」

「……分かつた。美魅、約束破つたら……おしおきだからね」

「あはは……それは怖いわね。ミサトの事だから、それは恥ずかしいおしおきなんでしょうね」

「当たり前よ、バーカ。トラウマを植えつけたやるんだから」

「あはは……」

その日から……私は友達と遊ぶ時間を減らした。減らした時間を、ミサトと一緒にいる時間にあてた。

まだミサトを、家に1人にしてはいけない。だから、“家族”である私が、ミサトの心を癒してあげたい。

今は……友達よりも、ミサトが大事だから。

「素敵……一緒に寝ない?」

「へ……?」

ある日の夜。

私は部屋で本を読んでいた。

すると……枕を持った寝巻き姿の//サトが、部屋に訪れてきた。

「い、一緒に……」

「や、やつぱりダメかな? さうだよね……」この年になって、お姉ちゃんは寝たくないよね……」

枕をギュッと抱き締めて、しょんぼつする//サト。……そんな顔をされたら、私が悪いみたいだった。

「はあ……いいよ。今日は寂しがりなお姉ちゃんと寝てあげる

「ホント?」? 嫌じゃない?」

「アンタから誘つといで、それはないでしょ。……ほら、おこで//サト

まだ読みかけの本を閉じて、ベッド//サトが眠れるだけのスペースを空ける。

「えへへー……あっがとつ」

ミサトは満面の笑みで、私の布団に入ってきた。そして

「 美魅ー！ 」 やふふー」

「 ハハハ……ー。 ミサト……」

布団に入るやいなや、ミサトは私に抱きついた。

「 美魅に抱きつぐの久しぶりーー」

「 バカ……つ……ちよつ……ビリ触つてんのーー？」

「 美魅の脇腹柔かーい」

「 つ……もしかしてミサト……『 呪ندる 』ーー？」

「 ふにゃー？」

よく見れば、ミサトの顔が紅い。そして、仄かにお酒の臭いがする。

「 えへへ～。 美魅～」

「 つ……頬擦りしないでー。 ちよつ……せわぐわに紛れてお尻触んないでよー。」

「 一緒に寝るの楽しいー」

「 寝てないでしょー」

「 ん～……いけずう。 いけずな子には、お仕置をしちゃいますー！」

ミサトは私の目を見つめて、どんどん顔が近づいてくる。お互いの唇と唇が近づいている。

「えー? ミサト……まつて! まつ……」

経験したことのない、暖かい感触と柔らかい感触が、私の唇に触れた。そして、時間が止まつたかのような感覚に襲われる。頭の中は真っ白で、目の前も何を見ているのか理解出来ない。だけど、身体にはミサトの体温がしっかりと感じじる。

だんだんと理解してきた……。

私のファーストキスが、ミサトに奪われた事を。

「えへへ。美魅とキスしちゃつたー」

「つづ……」

ミサトは笑っていた。

姉弟の関係である私とキスをしたというのに、笑っていた。だけど、私は笑っているミサトに、何も言えなかつた。

だつて、この日のミサトは……久しぶりに笑顔を見せてくれた……。ずっとずっと待ち焦がれていた、ミサトの笑顔。たとえお酒の力だとしても、ミサトの笑顔だつた。

この笑顔を……壊したくなかった。

「ねえねえ美魅」

「な、何よ……」

「“もう一回”しょー? 美魅とのキス気持ちいい~」

「えつ……それは……」

「してくれないの……?」

ミサトから笑顔が消えた。  
またしょんぼりとした顔になる。  
せつかくの笑顔が……消えた。

「ミサトが……それで笑ってくれるなら……」

「いじつじ」とー? やつたー! うへへへ、美魅い~

「つ……」

ミサトの激しくも優しい行為が、じぱりく続いたのち……ミサトはそのまま寝てしまった。

本当に幸せそうな寝顔で……。

「ミサト……」

私は無意識にミサトの頭を撫でていた。ミサトの髪はサラサラとして、撫でている身なのに、嬉しくなってしまつ。

「大丈夫……私がミサトを守つてあげるから……。ミサトがもつと笑えるように、私は何でもするから……だから……」

…………昔のミサトに戻つてほしかつた。お酒なんか飲まなくて、自然と笑えるミサトに……。私に変わらきつかけをくれたミサトに戻つてほしかつた。

でも……私は間違つていた。  
全てを、間違えていた。

「素敵い～」

「つわあ！？」

「素敵つていい臭いがするよね～」

「だからつて突然抱きつかないでよ……だ、抱きつくなら一言言つてからにしてつて……いつも言つてるでしょ……」

“あの日”からミサトは笑顔を見せるよつになつた。  
それと同時に、抱きつく・頬擦りをする・キスをせがむ……などの行為を、私に求めてくるよつになつた。

“あの日”の記憶が……お酒の力をもつてしても、ミサトには鮮明

に残されていた。

「一言言つたら、してもいいんだ？ ジャあ……キスしよ」

「つ……ま、また？」

「いいじゃーん。姉弟のスキンシップだよ～」

「姉弟にしては、激しすぎない……？ つてか本当は姉弟でこんなこと……」

「もう今さらだよ……美魅」

「つ……」

「美魅……“好きよ”」

“今さら”、そつ……今さらだつた。私達はもう、元の姉弟には戻ることができなかつた。

何故なら……ミサトの中での私に対する“家族愛”だつた感情が、  
“異性愛”に変わつたから……。

いつかは分からぬ。気づいた時には、遅かつた。

私が、ミサトの求める事を受け止め続けていた結果が……私を“異性”として見るという結果を生んでいた。

間違いを正そうとすれば、笑顔が消えて。

笑顔を守ろうとすれば、間違つた関係になつていく。

「美魅は、私のこと……好き？」

「な、何なの……突然」

「いいから答えなさい」

「う……“姉”としては好きよ」

「違うわよ！ バカッ！」

「な、何が違うのー？」

「“女”として、好きかどうかを聞いてるのー。まったく美魅つたら、男の娘なのに女心を分かつてないんだから」

「女として……つて」

ミサトに言つべき答えは分かつている。“好き”って言えば、笑顔を守れる。でも……それだと間違つたままになつてしまつ。

「嫌いなの……」

「ち、違うー。す、好き……ミサトの事は……女性として魅力的で、好きだからー！」

「ほ、本当に？ えへへへ。じゃあ私達、両思いだねー！」

「そ、そうね……あはは……」

何を間違ったのか、考へること事態が間違っていた。考へるも何も……間違った答へなんて、存在するはずが無い。間違った答へは、答へじやないから……。答へば、正解しないと答へじやない。つまり、私には最初から……正解なんて無かつた。むしろ、間違いしかない。

私が生きていること事態……間違いなのだから。

「 美魅、服を脱ぎなさい」

「えつ……？」

「えつ？ ジやないでしょ。私達は面思いなんだから、夜は“愛し合つ”ものでしょ？」

「ひょ……ひょと待つてー。//サトが何を言つてゐるのか意味が分かんなこよー」

「そのままの意味。で、早く脱ぎなさい。あははつ、緊張するわね……私も初めてだから」

「だから待つてー。//サトおかしこよー。そんな……//サトが言つてる事つて……その……近親相……」

「…………してられないの？」

ミサトの目が……いつも以上に光を失い……笑みも、氷のよつた冷たい無表情に変わった。

見たことのない……見たくない表情だった。

「つ……」

ミサトの為なら……何でもする。何でもしてあげる。何でも……捨てる。

そう決めたはずなのに……私は怖がっていた。近親相姦をしてしまえば……その先に光なんて無い。未来なんて……存在しない。

「美魅も……私を捨てるの？」

「つっ！？」

「私を……一人にするの？」

「……しないよ……」

でも……私の未来なんて……ミサトが笑わない未来よりも、価値なんて無い。

私の未来は……ミサトがまた笑ってくれる未来。

「ミサトを……一人になんかしないよ……。ミサトの側には、私がいてあげるから……ね？」

「えへへ、そうだよね！ 美魅がいてくれるよね……。美魅、愛してる……だから、愛し合おう？」

「……うん。ミサトが……それを望むなら……私は……」

“もう一度笑顔が見たい”ただ、それだけの願いだった。  
他に何も望んでなかつた。

笑ってくれるなら、たとえせっかく親しくなつた友達が、前みたいに親しくなくなつてもよかつた。  
何なら、五感もいらない。四肢もいらない。

ただ……ミサトにもう一度笑つてほしいだけだつた……。  
もう一度……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3336/>

---

女王様は王子様!?

2011年10月30日01時21分発行